

令和四年四月

授業の手引（高等学校国語）

愛知県総合教育センター

授業の手引（高等学校国語）

「県立高等学校教育課程課題研究（国語）」では、高等学校国語科の教科指導に関してさまざまな情報交換を行い、当面する国語科教育の課題についての調査研究を進めています。その中で、高等学校国語科の先生方の授業実践を支援する具体的な手だてとして作成したのが、「授業の手引（高等学校国語）」です。

この手引は、愛知県総合教育センターにおける研修用のテキストとして使用することを第一に考えたものですが、初任の先生方から中堅・ベテランの先生方に至るまで、それぞれの立場に応じて活用できるよう工夫をしています。内容面では、平成三十年三月告示の学習指導要領に基づき、言語活動を充実させるためのアイデアや、評価方法の工夫などについての提案を盛り込みました。授業のヒントとして使用できるコラムも豊富にあります。多くの国語科の先生方に利用され、授業の活性化に役立てられることを望みます。

運営委員長

愛知県立名古屋西高等学校 校長 小塩 卓哉（令和二年度）

愛知県立豊田北高等学校 校長 河合 龍二（令和三年度）

運営副委員長

愛知県立千種高等学校 教頭 渡辺 英樹（令和二年度）

運営委員

高等学校 教育課 課長補佐 林 直紀

指導主事 大河 靖知

指導主事 亀田 篤

「県立高等学校教育課程課題研究（国語）」研究員

愛知県立松蔭高等学校 教諭 富田めぐみ（令和二年度）

愛知県立名古屋南高等学校 教諭 西本 花織（令和三年度）

愛知県立瀬戸工科高等学校 教諭 水野 司麻（令和二年度）

愛知県立一宮興道高等学校 教諭 川野 恭一（令和三年度）

愛知県立旭野高等学校 教諭 藤原 智子（令和二年度）

愛知県立岩倉総合高等学校 教諭 瀬川 由起（令和二年度）

愛知県立大府高等学校 教諭 荒川 英之（令和二年度）

愛知県立加茂丘高等学校 教諭 小辻 輝明（令和二年度）

愛知県立岡崎西高等学校 教諭 有馬 彰吾（令和二年度）

愛知県立幸田高等学校 教諭 長谷川雄三（令和二年度）

愛知県立刈谷高等学校 教諭 森山 怜子（令和二年度）

愛知県立安城高等学校 教諭 土屋 豊樹（令和二年度）

愛知県立高浜高等学校 教諭 渡邊 友章（令和三年度）

愛知県立御津高等学校 教諭 細澤 美沙（令和三年度）

愛知県総合教育センター 研究指導主事 三浦千加子

はじめに

愛知県総合教育センターでは、高等学校における国語科指導の参考資料として、平成元年度に初めて「授業の手引」（以下「手引」）を作成しました。その後、学習指導要領の改訂等に伴って「授業の手引」も改訂を重ね、今回七代目の「手引」を公開することになりました。

平成三十年三月に今次の高等学校学習指導要領が公示され、令和四年度から年次進行で実施されます。この学習指導要領において特に重視されているのが、社会で求められる資質・能力の育成です。この力は長年学校教育で提唱されてきた「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指すものとして、「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」という三つの柱で整理されています。

国語科においても、授業の創意工夫や教科書等教材の扱い方の改善を引き出していくことができるよう、目標や内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に合わせて再整理しています。そして、どのような資質・能力の育成を目指すのかについて、より明確にするために、科目構成が見直され、六つの科目が新設されました。

こうした資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、主体的な言語活動を取り入れた授業改善に取り組むことが必要です。そこで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を活性化し、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」の育成を目指すことになりました。

この「手引」は、県立高等学校学校教育課程課題研究（国語）に所属する委員が、これまでの研究や実践を基に執筆したのですが、右のような点を踏まえ、多様な授業や言語活動の在り方を提案し、学習指導案等の資料とともに示しています。平成十八年版の「手引」の形式を踏襲し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域ごとに、指導の目標や具体的な手だてを記し、指導と評価の流れが具体的に分かる単元案・学習指導案・ワークシート例などを付しました。初任者研修のテキストとしての機能を第一に考えましたので、基礎的な内容もありますが、国語科の今日的な課題を考える資料として多くの先生方に御活用いただければ幸いです。授業のヒントとして使えるような十五編のコラムも掲載してあります。

不十分な点も多くあるかと思いますが、今後更に充実を図っていく所存ですので、御高覧の上、御批正を賜れば幸いです。

令和四年四月一日

愛知県総合教育センター

第一章 授業に臨む前に

一 国語科の目標と課題

(一) 国語科の目標

平成三十年に告示された高等学校学習指導要領（以下学習指導要領）において、国語科は二つの共通必修科目と四つの選択科目が新設されることとなった。前者は「現代の国語」「言語文化」であり、後者は「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」である。科目新設の目的は、育成する資質・能力を明確にすることである。特に、教材を手段として用いて、資質・能力の育成を図ることに重点が置かれた。

今回の改訂では各教科で育成すべき資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱で整理している。国語科の目標も次のように整理された。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

(2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え

合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。

(3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたる国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

目標に、「言葉による見方・考え方を働かせ」とあるが、これは国語科においては言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象として表している。

従来の高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分に行われていないこと、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないことや、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが中央教育審議会答申（二〇一六年一月二一日）で課題として指摘された。

こうした課題を解決するために、「現代の国語」では「話すこと・聞くこと」「書くこと」の時間数が増加され、実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けることが目標とされた。また「言語文化」では生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けることと、我が国の言語文化に対する理解を深めることが目標とされた。必修科目では、実社会に出たときに必要な力や、生涯にわたって必要となる国語の力に焦点を当てた資質・能力の育成が目標と

されているのである。

こうした必修科目の目標は選択科目でも同様に示されている。

「現代の国語」の「知識及び技能」の目標は「論理国語」「国語表現」に系統づけられているが、そのうち「読むこと」と「書くこと」の領域は特に「論理国語」に、「書くこと」と「話すこと・聞くこと」の領域は「国語表現」に示されている。「言語文化」の「知識及び技能」の目標は「文学国語」「古典探究」に系統づけられており、特に文学全般を扱う科目を「文学国語」、古典を扱う科目を「古典探究」と設定している。

各科目の目標も教科の目標と同様に、三つの柱に合わせて設定されており、その目標をより具体化・細分化したものが、学習指導要領に記されている指導事項である。詳細については後ほど触れるが、指導事項に示されている資質・能力は、読み書きに必要な基本的な国語力（漢字・文法・語彙などの理解・運用能力）と古典の世界に親しむための力に加えて、情報の扱い方に関する事項が加えられた。昨今の情報化社会において「情報と情報との関係」や「情報の整理」が実社会において必要な資質・能力となることは間違いない。言葉扱う国語科が育成を図るべき新たな資質・能力であろう。

これらの知識や技能は「思考力、判断力、表現力等」の指導事項を通して指導することになっており、この「思考力、判断力、表現力等」の力は言語活動を通して育成することとなっている。よって、言語活動の充実が求められることになるのである。

(二) 言語活動の充実

学習指導要領では、「思考力、判断力、表現力等」について言語

活動を通じて指導することが明確にされている。今回の改訂により、領域ごとの指導がより重視されることとなった。「現代の国語」を例に領域ごとの言語活動例を確認すると「話すこと・聞くこと」の領域では、スピーチ、質問、批評、議論、討論などの言語活動が、「書くこと」の領域では、手順書や紹介文、案内文、通知文などを書いたり、調べたことを報告書や説明資料などにまとめたりするといった言語活動が、「読むこと」の領域では、引用や要約などを行いながら論述したり批評したりする活動や、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりするなどの言語活動が提示されている。こうしたさまざまな言語活動が重視される背景には、次のような社会情勢がある。

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には挑戦の時代を迎えると言われている。新たな時代には進化した人工知能（AI）がさまざまな判断を行ったり、IoTが広がったりすることで、社会や生活は大きく変容し、そこに生きる私たちも日々急速な変化を迫られることになる。また、情報化やグローバル化が進展する社会においては、多様な事象が複雑さを増し、予測困難な時代を迎えることになると言われている。

教育には、こうした時代や社会の変化を敏感に捉え、対処する力を生徒に身に付けさせることが求められる。

変化の激しい環境にあつて大切なのは、既存の知識や情報を蓄えるばかりでなく、それらを臨機応変に活用し、足りないものを獲得していく力である。今後更に、既習の知識を更新し技術を学び続ける姿勢や、パラダイム転換を可能にする柔軟な思考力が重要となる。

学習指導要領には、生徒の思考力、判断力、表現力等を育む観点

から、教科を問わず言語活動の充実に配慮することが記されている。判断し、表現することで「深い学び」へとつなげていくためであり、それは、各教科がそれぞれの「見方・考え方」を働かせ、思考し、このための言語活動がさまざまに考えられているのである。

コラム①【教師の仕事の成果】

一流の教師の仕事の成果とはどういうものだろうか。生徒に好かれている、生徒の成績が上がる、保護者の信頼が厚いなど、さまざまなイメージが頭に浮かぶ。

ここで「一流の教師について」（大村はま『教えるということ』より一部省略して引用）を紹介する。

仏様がある時、道端に立っていると、一人の男が重い荷物を積んだ車を引いて通りかかり、ぬかるみにはまってしまった。何度も抜け出そうと男は苦しむが、なかなか抜けない。仏様はしばらく様子を見ていたが、指でちよつと車に触れた。その瞬間車はぬかるみから抜け出すことができ、男は車をからからと引いていくことができた。男は仏様の指の力で抜け出せたことは知らない。自分が努力して抜けたのだという自信と喜びで車を引いていったのだ。

右の話を先輩教師から聞いた大村はまは、「もしほんとうにすばらしい教師であったなら、子どもは私のこと（存在）など思わないかもしれないと思います。あの仏様の指のような存在でありたいと思います。先生の指がふれたとも気づかずに、自分の能力と思い、自分のみがきあげた実力であると思いい、自信に満ちて次の時代を背負ってってくれたら、私はほんとうの教師の仕事の成果はそこにあると思うのです。そして、仏様の指のような見事な技術を持ちたいと思います。」と思ったそうです。

「先生のおかげでここまでできた」と言われると、教師としては喜びを感じるのが当然であろう。しかしそれは一流、三流に過ぎない。一流の教師というのは、生徒自身の力で何事かを成し遂げたと感じさせることができる人である。

◆参考資料◆ 大村はま著『教えるということ』 共文社 一九七三年

(三) 主体的・対話的で深い学び

学習指導要領の改訂にあたり、「主体的・対話的で深い学び」という言葉が見られるようになった。今回の改訂により、学習指導要領では育成を目指す資質能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に分けているが、こうした資質・能力の育成を目指して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されている。では、「主体的な学び」とは、あるいは「対話的な学び」とは、また「深い学び」とはどのようなことであろうか。これについては中央教育審議会答申（二〇一六年一二月）で提示されている。

主体的な学び

学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。

対話的な学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。

深い学び

習得・活用・探究という学びの課程の中で、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向

かう学び。

「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」が、この答申で示された。

こうした学びに取り組みせることを意識して、教師は授業を組み立てなければならぬ。

授業改善に向けた「授業者」の視点で考えてみると、主体的な学びのためには、まず既習事項を振り返って学習課題を設定し、解決する方向性について見通しをもたせたり、生徒に自分の考えをもたせ、その思考を見守ったり、生徒の思考に即して授業展開を考えたり、生徒の考えを生かしてまとめたり、学びを振り返らせ新たな学びに目を向けさせたりするといったことが考えられる。

対話的な学びのためには、生徒同士で思考を交流させ、交流を通じて思考を広げたり、協働して問題を解決したりすることを促したり、発問などで教師が子供の学びを引き出させたりするといったことが考えられる。

深い学びのためには、身に付けさせたい資質・能力を焦点化すること、単元や各授業の目標を把握すること、ねらいを達成した子供の姿を具体化すること、教材の価値を把握すること、単元及び各時間の計画を立てること、目標の達成状況を評価することなどが挙げられる。

こうした「主体的・対話的で深い学び」のために、グループワークが行われている。隣同士で教科書を交互に音読する活動から、数

人のグループで解釈や意見を交流し合う活動まで、グループワークといってもさまざまな目的や形態があるが、生徒同士の学びを交流させることにより、生徒の発言機会が増え、活動が活発になり、思考も活性化される。知識を広げ、思考力や判断力を磨き、表現力やコミュニケーションの力を高める学習が期待できる。

一方で、グループワークには留意点もある。グループの中で、ファシリテーター（促進者）の生徒が、他の生徒たちを促しながらグループワークを進め、記録者や発表者の生徒も自分に与えられた役割を理解し、周囲との調整を考えながら活動する様子は、正に主体的・対話的な学びに見えることだろう。教員の負う役割はタイムキーパーとして時間を伝え、活動の切れ目で指示を出すだけではない。グループワーク中は生徒に任せべきで、指導者が口を出し過ぎるのは生徒の主体性の目を摘むことになる。しかし、適切な場面面で、生徒の状況に合わせた指導を入れることこそ指導者の大切な役割である。例えば発表をきっかけとして広がる発問を加えたり、生徒の気付いていない視点を指摘したりしながらより深い学びへと導くことが指導者の役割である。

生徒の相互交流による学習が不向きな生徒もいるだろう。グループを作れば相互交流やグループワークが始まるわけではない。指導者は、グループで行う学習活動の内容や目的を明確にして生徒に伝え、理解させる必要があるし、学習活動の成果に対して評価も行う。活動中は、学習が適切に行われるよう援助したり、指示を与えたり、活動を促進したりする技術が求められる。時間や内容に関するルールや制限を設ける必要がある。このように、生徒の相互交流による学習では、指導者は知識の教授者ではなく、学習活動のコーディネ

ーター（調整者）やファシリテーターとしての力を発揮する必要がある。

グループワークが表面的な活動ではなく、深まりのある対話的活動となるためには、事前にある程度の知識を教えることも必要である。この際に指導者から生徒への一方的な知識の伝達のみとならないよう、発問を工夫したり、ペアでの話し合いの時間を取り入れたりするなど、生徒の思考がアクティブになるような授業展開が望ましい。どちらの授業にしても、大切なのはバランスであり、偏りすぎてしまうことは避けたい。指導者は、授業内容に合わせて、どういったスタイルの授業が本時の授業として適切であるのか、選択できることが望ましい。そのためにも、日々、授業参観や研修などの機会を有効に使うて情報を集め、授業スタイルのさまざまな引き出しをもっておくことが肝要であろう。

中央教育審議会答申（二〇二一年一月）で提示されている「令和の日本型学校教育の構築を目指して」においても「主体的・対話的で深い学び」について述べられている。そこには『「個別最適な学び」と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる』とある。「協働的な学び」において、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、必要な資質・能力を育成することと、「個別最適な学び」において指導方法や指導体制の工夫改善により「個に応じた指導」の充実を図ることの双方を一体的に行うことが必要とされている。ここでは基礎的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習の調整をしながら粘り強く学習に取り組む態度を育成するという指導の個別化が求められている。ICTを活用

するなどの手段を用いて、生徒一人一人に応じた学習活動や学習課

題に取り組む機会を提供することが一例として挙げられている。

コラム②【アクティブ・ラーニング型授業】

アクティブ・ラーニング（以下AL）型授業を取り入れる際に多く挙がる声のうちの一つは、「教えたいことを授業時間内に教えきれぬのか」、「生徒自身で力を付けられるか」ということである。その疑問の解消に当たって二つの考えを紹介したい。

一つ目はねらいの精選である。教員はよくも悪くも教えたいものである。そして、「アレもコレも」となり、ねらいが散逸してしまうことがある。そこで、ねらいを明確にし、それ以外を「捨てる」（別の機会に学ぶ）ことを考えたい。教えることを手放すのは怖い。しかし、一度に全てを教えてもそれが身に付くとは限らないし、ポイントを絞ることで身に付くこともある。二つ目は「ALは講義」の対立構図ではないということである。授業の全てを生徒が活動する時間にしなければならないことはない。講義と活動の両方を授業の中に取り込めばいい。講義・活動Ⅱ・Ⅰになることもあるだろう。AL型授業には講義は不要だ、という誤解があってはいけない。他にも様々な懸念事項があるが、「まずやってみよう」という姿勢をもってほしい。例えば授業の終わりに近くの人と5分程度振り返りを行うことから始めるのもよい。過去の授業実践をまねするのもよい。最初はうまくいかないかもしれない。しかし、その中でも、これまでの講義一辺倒では得られない、知識を活用する力や主体的に学びに向かう姿勢が育つ姿をきつと見ることができはるはずだ。最後に、これまでとやや矛盾するが、ALはあくまで教授・学習方法の一つに過ぎないことも気に留めておくべきである。AL型授業を行うことを目的とするのではなく、まずは育てたい生徒像や身に付けさせたい力を考えることから始めたい。指導者の思いがあるからこそ、ALが手段として生きる。形式や手法にこだわらず、自身の教育観と向き合うことがAL型授業を始める際の第一目になる。現在、生徒たちの本質的な学びを実現するために、授業の質的転換が求められている。これまでの国語教育が培ってきた優れた部分を継承していくのと同時に、変化をおそれず変わり続けていく姿勢をもちたい。

二 教育課程と指導計画

(一) 教育課程と年間学習指導計画

各学校には、年度当初に作成される「学校経営案」があり、その中に「教育課程表」が掲載されている。「教育課程表」は、生徒が三年間でどの教科等を何単位学習するかを記載したものである。

三年間の見通しを記した「教育課程表」に従って、「年間学習指導計画」をつくる。「年間学習指導計画」は本県においては「学習指導マネジメントシート」として、計画と評価、振り返りができる様式となっている。このシートを活用することで、PDCAサイクルを回し、指導と評価の一体化を図ることとしている。また、単元ごとの指導と評価の計画の概要を、年間における全単元についてまとめるものであるため、作成すると、生徒に一年間でどのような力を、どのような段階を踏んで身に付けさせていくのが明確になる。以下に「学習指導マネジメントシート」に記載すべき項目を記しておく。

- ・ 概要（教科、科目、学年、単位数、教科書、補助教材、指導者）
- ・ 科目の目標（学習指導要領に示された目標）
- ・ 評価の観点及びその趣旨（観点到別に記す。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点）
- ・ 年間に指導する単元と学習内容（実施する学期、単元及び学習内容、言語活動、教材、配当時間、評価の観点、評価規準、評価方法、進捗状況、反省等）
- ・ 年間配当時間、領域別配当時間、各学期ごとの学級別実施時間、年間実施時間

「学習指導マネジメントシート」の作成に当たっては、当該科目の指導事項を、一年間で全て指導できるよう計画を立てる必要がある。また、学習指導要領には領域ごとの時間数が決められているため、この時間数に合わせて授業を実施しなければならぬ。

そのためにも、前年度中に、教科会等で検討しながら、作成を進めておくのが望ましい。

(二) 単元の指導計画

学習指導マネジメントシートに従って単元の指導計画を作成する。作成の手順は、①生徒の実態把握、②単元の目標の設定、③言語活動と教材の選定、④単元の評価規準の設定、⑤評価方法の設定となる。

①生徒の実態把握は、一年の初めに行うだけではない。各単元に入る段階で、その単元の目標を設定するために検討する必要がある。これから学習しようとする単元は、興味・関心の方向から（生徒が関心をもちやすそうなものか、生徒にとって関心のあるどんな話題と関わりがありそうか）、この単元で扱う指導事項について、指導事項に関する習熟状況から（生徒は今までに学んだことがあるか、あるとすればどの程度身に付けているか）、この単元で使えそうな言語活動について、言語活動に関する経験値から（生徒は経験しているか、どの程度習熟しているか）など、実態把握もいろいろな観点からしてみるとよい。授業展開のヒントが見えてくることもある。

②単元の目標は、学習指導要領の「指導事項」に即したものとす。一単元につき、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」

のうち一領域を指導する。①の実態把握に基づき、取り上げる指導事項の文言に沿った形で、ふさわしい目標を設定する。

③言語活動は、指導事項を指導するのにふさわしく、かつ生徒が取り組みやすい活動を設定する。学習指導要領の言語活動例を参考に、②で設定した目標を達成するためには、どのような活動が適切かを考え、その活動が生徒の力に合っているかを検討した上で、魅力的な活動を設定するとよい。

④単元の評価規準は、単元の目標に沿った形で、評価の観点ごとに設定する。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の計三つの観点ごとに、評価規準を定める。評価規準は、単元の目標を具体化したもので、「知識・技能」「思考・判断・表現」については、対応する単元の目標の文末を「～している。」として作成するが、「主体的に学習に取り組む態度」については、単元の目標や学習内容に応じて工夫して作成する(第二章二(四)「学習指導案の作成の仕方」参照)。

⑤評価方法は、評価規準に基づき、評価したい学力に対応していることが大切である。基本的な学力である「知識」については、ペーパーテストによっても評価することができるが、発表したり、記述したりするような「技能」や発展的な学力を含む「思考・判断・表現」については、ペーパーテストのみで評価することは難しい。そこで、「パフォーマンス評価」によって評価することが考えられる。「パフォーマンス」とは、自分の考え方や感じ方といった内面の精神状況を、動作や言語や書画などによって表現すること、あるいは表現されたものを言い、国語科においては、例えばレポートやエッセイ、脚本、朗読、プレゼンテーション、ディベートなどが考

えられる。こうした課題(パフォーマンス課題)を与えて遂行させ、そのパフォーマンスの質によって評価するのがパフォーマンス評価であり、発展的な学力を捉える妥当性(評価したい力を評価しているか)の高い方法である。

パフォーマンス評価を行う際に大切なことは、評価方法の信頼性(誰が評価しても同じ結果になるか)を高めることである。ペーパーテストが信頼性の高い評価方法であるのに対して、パフォーマンス評価は、適正な達成度づくりをしなければ、評価者によって評価が大きく分かれることになり、信頼性に乏しい評価になりかねない。そこで、活用したいのが「ルーブリック」である(詳細は第六章(二)参照)。

ルーブリックの作成には、複数の指導者で取り組めるとよい。また、生徒が参加してもよい。ルーブリックの作成によって学習目標が明確になり、生徒はそれを自己評価の指針にすることができるからである。一方で、ルーブリックは、生徒のパフォーマンスを評価していく中で、より適切な形に修正していく柔軟なものであることが望ましい。実際の評価場面において、指導者や生徒が事前に予測しなかったようなパフォーマンスが現れることも多いからである。

(三) 各時の指導計画

単元の目標を踏まえて、各授業時間における目標を、生徒の具体的な姿として設定する。学習内容については、生徒が適切な言語活動をを行い、目標とする力を身に付けられるように工夫する。各時の評価規準は、各時の目標に照らし、「おおむね満足できると判断される」生徒の具体的な姿をイメージして設定する。各時の評価規準

は単元の評価規準を踏まえたものであること、また観点別の評価規準は毎時三観点必要なものではなく、単元全体として三観点を評価することができればよい。評価方法については、授業中の発表や活動の観察、ワークシートやノートの記述の点検、確認、分析等を、評価の観点に応じて適切に選択する。なお、生徒による自己評価・相互評価は学習活動の一環であるため参考にとどめ、指導者が行う評価とは区別する。

◆参考資料◆

- 川本信幹『魅力ある国語の授業を創る』東京書籍 二〇一〇年
町田守弘編著『実践国語科教育法』学文社 二〇一二年
田近恂一・鳴島甫編著『国語科教育法研究』東洋館出版 二〇一三年
高木展郎『変わる学力、変える授業』三省堂 二〇一五年
西岡加名恵編『高等学校教科と探究の新しい学習評価 観点別評価とパフォーマンス評価実践事例集』学事出版 二〇二〇年
「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」リーフレット 文部科学省国立教育政策研究所 二〇二〇年

コラム③【グループワークの進め方】

アクティブ・ラーニング型の授業方法の一つに、グループワークがある。グループワークを授業で活用することで、主に「自主性や協調性」、「コミュニケーション能力」などが育まれると言われている。ここではその基本的な進め方を紹介する。

グループワークの進め方（*・補足事項）

- (1) 三〜八人程度のグループをつくり、テーマ（問題・課題）を知る
- (2) ファシリテーター（促進者）やタイムキーパー、記録係など役割分担する *1
- (3) グループで議論する（話し合う）
- (4) グループの結論をまとめる
- (5) クラス全体で発表する *2
- (6) グループで振り返る

*1 役割分担については、「あらかじめ教師が指定する」、「グループで話し合わせる」、「輪番制」など工夫できる。記録係は、参加者の発言内容をメモする。

*2 必ずしも全体発表が必要なわけではない。

コラム④【グループワークの手法Ⅰ ブレインストーミング】

(1) ブレインストーミング↓ある問題(テーマ・課題)について、自由にアイデアを出し合い、さまざまな発想を得る中でよいものを抽出し、問題解決に結び付けていく手法。四つの「基本原則」がある。

四つの基本原則

- ① 批判をしない (実行できるかどうかなどの判断はせず、とにかく意見を言いやすくする。)
- ② 自発的に発言する (思いついたらどんなことでも自由に発言するようにする。)
- ③ 質より量を求める (できるだけ多くのアイデアを出すようにする。)
- ④ 新しい発想を目指す (他の人の意見を聞いて、連想したり、組み合わせたりする。)

実施方法

- ① ファシリテーター(促進者)やタイムキーパー、記録係などの役割を分担する。
 - ② 全員が順番に発表する。
 - ③ 発言の順番が回ってきたら必ず何か言う。「(特にありません)」などは不可。
 - ④ 発言の内容は幾つあってもかまわない。
 - ⑤ 他の人のアイデアや意見を繰り返し返してはいけない。
 - ⑥ 他の人が言った意見や聞きながら思いついたことをメモする。
 - ⑦ 発言は最低三巡以上する。
 - ⑧ 順番に意見を出し合った後で、出たアイデアについて質疑応答する。
- 質疑応答する際の注意点
- ① 出ているアイデアの意味をはっきりさせる。
 - ② 発言の背景を明らかにする。
 - ③ 質疑応答や対話の中で、新しい意見・アイデアを生み出す。
 - ④ 反対意見もメモする。批判ではなく、対話のための素材を加える。

第二章 授業の構想

授業を構想するときを考えなければならない点が四点ある。目標（何を指すか）、指導法（どのように展開するか）、教材（何をを用いるのか）、評価（生徒のどんな力を見取るか）の四項目を念頭において、授業の構想について述べる。

一 目標設定の前に

(一) 生徒の実態把握

ア 生徒の国語力

目の前の生徒が、今までにどのような国語力を養ってきたか、国語に関する興味・関心はどれぐらいあるのかを把握する必要がある。

国語力は学習指導要領の三つの柱に合わせて考えることができる。「知識及び技能」では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」と「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」があり、「思考力、判断力、表現力等」では「話す・聞く」「書く」「読む」活動に関わる言語運用能力の育成が目標とされている。さらに、生徒が主体的に学ぼうとしたり、粘り強く自らの学力を調整しようとしたりする力や感性・思いやりなどの「学びに向かう力・人間性等」にも着目し、総合的な国語力を把握するように努めた

イ 生徒を取り巻く言語環境

ソーシャルメディアにより、限定的ではあるが、他者とのつながりが瞬時に可能となり、自分の好きな時に考えを発信することができる。またグループ内でしか通用しない絵文字、インターネットスラングなどの新しい表現が日々誕生している。

一方、読書環境においては、ウェブ版の新聞や辞書、電子書籍などの普及によって、書店や図書館まで足を運ばなくても、手軽に文章に触れることができるようになった。

ウ 生徒の精神的発達特性

授業中に積極的に発言しない生徒や、発言の声が小さい生徒に対して、「分らないから発言しない」「やる気がない」と一方的な決めつけをしないように注意する。生徒は自己意識の高まりとともに、周囲との関係性を重視する時期にいることから、クラスメイトの視線を気にして右のような行動をとることもある。

(二) 求められる国語の力

変化の激しい社会に対応するため、実社会で活用できる言語能力の育成と生涯にわたって学び続ける態度が必要である。論理的に意見を述べる力、言語表現を通して相互の立場を理解し合う力、目的や場面に応じてふさわしい表現をする力、さまざまな資料に基づき先を見通す力が必要となる。

さらに、言葉を通して他人を理解する心、物事に感動する心などの感性を育み、言葉の美しさについての感覚を磨き、多様な言語文化に関心を寄せる態度を育てることが求められる。

コラム⑤【グループワークの手法Ⅱ ジグソー法】

ジグソー法↓学習者同士が教え合いながら学習を進めていく手法。基本的に「ホームグループ」・「エキスパート活動」・「ジグソー活動」という三つのステップに沿って行う。

〈実施方法〉

① 「ホームグループ」とは、学習者がそれぞれ所属するグループのことで、クラス全体を均等に幾つかのグループ（三〜八人）に分ける。また、全体に人数分に分割した「学習課題」を与える（例・四人の五グループの場合、課題を四分割し、一人に一つの課題を与える）。

② 「エキスパート活動」では、ホームグループのメンバーそれぞれに異なる学習をしてもらう。

③ 「ジグソー活動」では、「エキスパート活動」で学習した内容を「ホームグループ」に持ち寄り、教え合うことで、全体的な学習内容をメンバー全員が習得する。

（例）四人、五グループの場合

I 最初に学習課題をAからDに四分割し、「ホームグループ」で一人につき一つの分担を決める。

II 同じ学習課題を学ぶ者同士が集まり、グループで協働的に学びながら学習課題に取り組み（例・課題Aに取り組む者同士、八人で集まる。以下BからDも同様）。この集団を「エキスパートグループ」と呼ぶ。

III 「ジグソー活動」で「エキスパート活動」での学習内容を、それぞれの「ホームグループ」に持ち寄り、専門家として「エキスパートグループ」で学習した内容を教える。全体の活動に関する振り返りを行う。

二 授業計画の作成

(一) 単元案の作成

各学校の学習指導マネジメントシートに沿った単元ごとの指導計画を作成する。長期計画の中で明確な見通しを立てることが大切である。

(二) 目標達成のための教材選定と教材研究

今回の学習指導要領の改訂では、これまで以上に「何ができるようになるのか(資質・能力の育成)」がクローズアップされている。それは、教材研究においても、改めて「教材ありき」で授業準備を進めるのではなく、「生徒に身に付けさせたい資質・能力」を考え、た上で教材を選定し、生徒の力の伸長を図るための授業を構築していく教材研究が必要であることを示している。

ア 教材選定

身に付けさせたい資質・能力にふさわしい教材を選ぶ。教科書所収の作品は学習指導要領の目標に沿って既に教材化されているので、それを利用する。しかし生徒の実情によっては、目標達成のために新たな教材を選択しなければならないことがある。日頃から指導者が生徒の興味を引くような資料を集めておくことよい。

なお、優れた教材は生徒に気付きを与える力をもっている。我々指導者は生徒の興味・関心の対象を見極め、学習意欲を向上させるような教材を発掘するべく、常に感性を研ぎ澄ますことを心がけた

い。次に掲げるものは、指導者の工夫しだいで教材となりうるものである。

- ・ 図表、音声、画像、動画
- ・ 地域教材（「あいち文学散歩」「あいちの文学」など）
- ・ 古典芸能（能、歌舞伎など）、演劇
- ・ 新聞、雑誌の記事
- ・ 漫画、アニメーション

なお、「読むこと」の指導で取り上げる教材については、「思考力、判断力、表現力等」の各領域の指導事項に示した資質・能力が確実に育成されるよう、科目の性格に応じて、より明確に設定されている（第五章二参照）。

イ 教材研究

教材研究では「目標とする資質・能力育成とのための教材の扱い方を考えること」と「教材理解」が同時並行で進む。

教材の扱い方には、単元目標に応じた言語活動や授業形態の選択、発問と板書計画の作成、生徒の実態に合わせた補助的ワークシートの作成なども含まれる。

また、教材を理解するには、作品それぞれのもつ力に気付くだけでなく、多面的な捉え方をするのが欠かせない。生徒の実態に合わせて教材を取り扱うことが必要になるからだ。

教材研究は、教材の取り扱いを考えることとその理解との間を行きつ戻りつしながら深めていくものである。

ウ 教材研究の際の留意点

高等学校の国語科の課題として、中央教育審議会答申（平成二十年十二月二十一日付）において、次のように示されている。

高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分に行われていないこと、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

読み取りが指導の中心になることで陥りがちなのは、指導書に示された内容をそのまま授業へ持ち込んでしまうことである。大切なことは、生徒の資質・能力の育成を考えた上で選択した教材を使って、よりいっそう言語活動の充実した授業を準備することである。そして、指導者が準備した全てを伝えようとするのではなく、生徒の成長の助けとなるときに開けられる引き出しを、幾つも用意しておくことが肝要である。また、これらのことに留意しながら教材研究を進めることは、おのずと「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習や古典の学習の課題に取り組むことにもつながる。古典などの授業において、本文を理解させたいあまりに、逐語的な訳に終始してしまい、生徒の興味・関心を削ぐだけでなく、何が身に付いたのか分からなくなってしまう。

さらに、教材研究の中で留意が必要なことは、どの領域においても中学校との接続を柔軟に捉えることである。その上で、目の前の生徒が育むべき資質・能力を見極め、高等学校の指導事項に沿った授業を展開できるようにしたい。小中学校で実施しているように、高等学校の授業でも単元の始めに生徒自身が身に付けるべき資質・能力を知り、見通しをもって授業に取り組むことができるようになることが必要である。また、初読の感想から授業後の変容を振り返るなど、生徒自身が学びによつての成長を確認できる機会を設けることが必要である。

なお、各領域の指導事項は、学習過程に沿って構成されている。このことも教材研究の際には留意してほしい。

(ア) 「話すこと・聞くこと」(第三章参照)

学習指導要領では「話すこと・聞くこと」に関する指導の改善・充実が求められている。実際の授業の中で「話すこと・聞くこと」の領域の学習が十分ではない原因の一つとして、学習指導案の立て方に迷うということがある。例えば、『話すこと・聞くこと』を指導する際には、特別に教材を用意する必要があるのではないかと、ということや、「言語活動(アクティブ・ラーニング)の指導の際の、他の領域との違いが曖昧」ということが挙げられる。もちろん、特別に教材を用意する必要はなく、それぞれの領域の内容を理解していれば、どの教材でも区別して授業をすることは可能である。単元目標を設定する際、それがどの指導事項に該当し、どのようなルーブリックが必要になるのかをよく考え、教材研究を進めていくことが大切である。

「話すこと・聞くこと」の指導事項は、学習過程に沿って次のように構成されている。

- ① 話題の設定、情報の収集、内容の検討
目的や場に応じて話題を決め、話したり聞いたり話し合ったりするための材料を収集・整理し、伝え合う内容を検討することを示している。
 - ② 構成の検討、考えの形成（話すこと）
自分の思いや考え、主張の合理性などが伝わるように話の構成や展開を工夫することを通して、自分の考えを形成することを示している。
 - ③ 表現、共有（話すこと）
聞き手に分かりやすく伝わるように表現を工夫することを示している。
 - ④ 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）
話の展開や論点などに注意しながら聞き取り、聞き取った内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価したりして、自分の考えを形成することを示している。
 - ⑤ 話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）
話し合いを効果的に進め、互いの発信を踏まえて、考えを広げたり深めたりしながら、話し合いの仕方や結論の出し方を工夫することを示している。
- なお、学習過程は指導の順序性を示すものではないため、指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない。

（イ）「書くこと」（第四章参照）

学習指導要領は、教材への依存や知識伝達型の授業を見直し、主体的な言語活動の充実を図るものとなっている。それは、一つには「書くこと」の授業時数の増加に表れている。「古典探究」を除く科目において、「思考力、判断力、表現力等」に「書くこと」の領域が設けられ、論理的な文章を書く資質・能力は「現代の国語」や「論理国語」を中心に、文学的な文章を書く資質・能力は「言語文化」や「文学国語」を中心に、実用的な文章を書く資質・能力は「国語表現」を中心に、その充実が求められている。変化の激しい現代社会において、情報の収集や、論理的思考に基づく課題解決能力を「書くこと」の側面から育成することは重要である。また、豊富な語彙の獲得、表現力の向上、文章の構成や展開の工夫によって、批評文や書評、報告書といったものを書く力を身に付けさせるところまで見通しを立てて教材研究に取り組む姿勢を身に付けさせたい。「書くこと」の指導事項は、学習過程に沿って次のように構成されている。

- ① 題材の設定、情報の収集、内容の検討
目的や意図に応じて題材を決め、情報を収集・整理し、伝えたいことや表現したいことを明確にすること。
- ② 構成の検討
文章の構成を検討すること。
- ③ 考えの形成、記述
記述の仕方を工夫し、自分の考えや主張、事柄などが的確に伝わる文章にすること。
- ④ 推敲、共有

読み手の立場に立ち、文章全体を整えたり、読み手からの助言を踏まえて、自分が書いた文章の特長や課題を書き手自身が捉え直したりすること。

なお、学習過程は指導の順序性を示すものではないため、指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない。

(ウ)「読むこと」(第五章参照)

「生涯にわたる社会生活に必要な国語」の力の育成を目指すことが、国語科の目標の一つとして掲げられ、特に「現代の国語」「論理国語」「国語表現」の目標では、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける」ことが求められている。それらの目標を達成するためには、一つの教材にじっくり向き合って内容を正確に理解する指導だけでなく、幅広い分野から関連する実用的な文章やグラフなど複数の教材を取り上げ、読み比べながら考えを深めたり広げたりする指導が必要になる。また、「言語文化」の言語活動例でも、複数の文章を読み比べることが明記されている。これは「言語文化」においても、一つの教材を正しく読み取るだけでなく、関連するさまざまな教材を読み比べて、共通点や相違点を理解することで自分の考えを形成していくような指導が必要であることを示している。そして、こうした幾つもの関連した教材を用意しておくためには、平生から新聞や雑誌などのメディア媒体に興味・関心をもつだけでなく、他の教員と情報交換するなど連携・協力していくことが不可欠である。

「読むこと」の指導事項は、学習過程に沿って次のように構成されている。

① 構造と内容の把握

叙述に基づいて、文章がどのような構造になっているか、どのような内容が書かれているのかを把握すること。

② 精査・解釈

構成や叙述などに基づいて、作品や文章の内容や形式について、精査・解釈することを示している。「精査・解釈」とは、作品や文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて意味付けたり考えたり評価したりすること。

③ 考えの形成、共有

文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成し、探究することを通して自分の考えを広げたり深めたりすること。「考えの形成」とは、文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の有する知識やさまざまな経験と結び付けて考えを広げたり深めたりしていくことである。

なお、学習過程は指導の順序性を示すものではないため、指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない。

(三) 授業の計画立案

単元案に基づき、目標作成、言語活動・教材の選択、評価の一連の流れを見据えて一時間ごとの計画を立てる。特に単元における「次」のつながりを意識し、一時間の授業の目標が独立しないようにする。また一時間ごとの評価を次の指導に生かすことが大切であるから、単元目標に沿いながら、一時間ごとの授業目標は柔軟に変更してもよい。

教材を媒介として、指導者と生徒又は生徒同士が交流し、生徒が意欲的に言葉を用いて授業に参加するような計画を立てるとよい。

(四) 学習指導案の作成の仕方

年間指導計画に基づき、単元全体、あるいは一単位時間の授業計画を記したものが学習指導案である。授業の目標を達成するために、何を(内容)、どのように(順序、方法)指導し、どう評価するかについて、他者にも明確に伝わるような指導案づくりを心がける。以下に、学習指導案の書き方と留意事項を記す(資料1参照)。

一 日時 授業実施日、時限を明記する。

二 学級 学級名と生徒数を記入する。特別教室の場合もここに明記する。

三 単元名 生徒に身に付けさせたい力を記入する。

四 単元の目標 学習指導要領の指導事項を三つの柱に合わせて記入する。

(1) 「知識及び技能」は「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項(2)情報の扱い方に関する事項(3)我が国の言語文化に関する事項」の三事項から一つを選び、文末を「〜できる。」とする。その下に(「知識及び技能」(1)の○)の形で学習指導要領の指導事項を示す。

* 「言語文化」「文学国語」「国語表現」「古典探究」は内容3(1)と(3)を踏まえる。

(2) 「思考力、判断力、表現力等」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域から一つを選び、文末を

「〜できる。」とする。その下に(「思考力・判断力・表現力等」(1)の○)の形で学習指導要領の指導事項を示す。

* 指導事項の一部を用いて作成することもある。

(3) 「学びに向かう力、人間性等」は、科目の目標の「言葉がもつ価値に関わろうとする」までを記す。

五 「言語活動」は「単元の目標」で選んだ三領域(「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」)の言語活動例を参考にする。(独自に考える際には、「単元の目標」を達成できる言語活動とする。)

六 「単元の評価規準」は「単元の目標」に沿って次の手順で作成する。

(1) 「単元の目標」の「知識・技能」と(2) 「思考・判断・表現」はそれぞれに対応した表現とする。文末は「〜している」とする。

(3) 「主体的に学習に取り組む態度」は①粘り強さ②自らの学習の調整③他の二観点において重点とする内容④当該単元の具体的な言語活動の内容を全て含め、単元の目標や学習内容等に応じて組み合わせを工夫して作成する。文末は「〜しようとしている。」

(例) 「粘り強さ」…積極的に、進んで、粘り強く等

「自らの学習の調整」…学習の見通しをもって、学習課題に沿って、今までの学習を生かして等

七 指導観 単元を実施する上で、「単元観」「学習者観」「教材観」の三点に対する指導者の捉え方を記入する。

(1) 「単元観」は指導者が教育課程の中でその単元をどのよ

うに捉えるかについて記述する。

(2) 「学習者観」は学習者の現状(興味・関心・姿勢)や、学習する教材を通して身に付けさせたい力を記述する。

(3) 「教材観」は授業で扱う教材の特徴及び活用方法を記述する。

八 単元の指導計画 表外に配当時間を書き、次の四段で構成する。

(1) 一段目「次」は学習の段階(ステップ)、「時間」は授業時数を書く。

(2) 二段目の「学習活動」は生徒の学習活動として記述する(文末は基本的に「〜する」)。

(3) 三段目の「言語活動に関する指導上の留意点」は指導者の立場として記述する。(文末は基本的に「〜させる」)。

(4) 四段目の「評価上の留意点」には「◇観点」「□点検・確認■分析」を記述する。「*努力を要する」支援の手だて」は全て「各次」に入れる。

「◇観点」は「単元の評価規準」の三項目のうち、少なくともどれか一つは必ず入れる。

(1) 知識・技能は(知)(2) 思考・判断・表現は(思)
(3) 主体的に学習に取り組む態度は(態)と省略し、複数重なった場合は(知)↓(思)↓(態)の順に記入する。

「□点検・記述■分析」は「行動・記述」の「観察・点検・確認・分析」+(評価するもの(ノート、ワークシート、自己評価票など))を記入する。

(例) □「記述の確認」(ワークシート)

■「行動の分析」(発表の様子) ※第六章参照

九 本時の目標 「単元の目標」の三項目のうちから一つを取り上げ、本時の学習を踏まえて適切に換言している。

十 本時の具体的な評価規準 「単元の評価規準」の中から「本時の目標」と同じ項目を取り上げ、適切に換言する。

十一 本時の指導 配当時間のうちの何時間目を明記する。

(1) 一段目の「学習段階」は「導入」「展開」「終結」の三段階とする。

(2) 二段目の「学習内容」には、生徒の学習活動の概要を書く。

(3) 三段目の「学習活動」には、生徒の具体的な学習活動を書く。学習ごとに①、②と番号を振る。

(4) 四段目は言語活動の設定がない指導案の場合、「指導上の留意点」とするが、言語活動を行う指導案の場合、「言語活動における指導上の留意点」とし、「本時の目標」を達成するために生徒にさせる「言語活動」の留意点を記述する。学習活動の(①、②…)と対応して(①、②…)に記述する。□又は■において「単元の指導計画」の該当項目を踏まえて記述する。評価する対象及び評価の方法を記述する。

十二 ルーブリック 本時がパフォーマンス課題を行う場合、ルーブリックを作成するとよい。作成した場合はここに取り上げる。

十三 御高評

狭くなりすぎないように注意する。

三 授業展開の工夫と活性化

(一) 形態

「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、具体的にどのような授業が考えられるのか、その授業展開を考える。個人学習をした上で、グループワークなどによる対話をし、振り返りなどの個人学習で深い学びにつながるような授業展開が基本となる。この他にも言語活動で発表したり、意見文や小論にまとめたりすることも考えられる。いずれにしても、その授業で生徒に身に付けさせたい力を設定し、授業展開を考えるとよい。目的に応じて、一斉学習、グループワーク、個人学習、発表（プレゼンテーション・ポスターセッション等）などのさまざまな形態を取り入れることが考えられる。

(二) 発問の工夫

発問・応答（返答）は思考することの第一歩である。この発問、応答（返答）によって授業が展開していくといっても過言ではない。単に「分かる」授業で終わるのではなく、「考えさせる」授業を展開することが大切である。授業終了後、その内容について、生徒が更に学ぶ意欲をもつことを目標に、単なる質問だけでなく、考えさせる発問を投げかけることが重要である。生徒の言語能力に合わせたオーブンエンド（答えが一つに帰結しない）の発問がよい。

ア 「声を出すこと」への誘い

発言や返答の誤りを他の生徒に知られたくないため、発言を控えがちになる青年期において、声を発することへの抵抗感がなくなるよう工夫したい。ペア音読、隣席の生徒同士の話し合い、アイスブ

レイクワーク（緊張感をほぐすエクササイズ）などは、発声・発言への抵抗感をなくすのに役立つ活動である。また、指導者が応答（返答）の誤りを頭ごなしに否定しないことも肝要である。

さらに、授業の流れが滞る場合は簡単な質問をし、緊張感が薄れたときは考えさせる発問を出すなど、生徒の様子をよく観察し、多種多様な質問・発問を織り混ぜていく工夫が求められる。以下に質問・発問のヒントを挙げる。

- ・ 授業の冒頭などに、生徒全員が簡単に答えられる質問をする。クラス全員に達成感があり、学習意欲が起ころ。
- ・ 意見が割れて討論になる発問を出す。指導者の発問について、生徒が各自で考えてノートに答えを記し、ペアで発表し合う。相手の意見を参考にし、自らの答えを振り返り、修正点を検討する。
- ・ この一連の活動が、論理的思考を組み立てる学習となる。
- ・ 本文中から根拠を探さなければならぬ発問をする。正確な読みが要求される。

・ 自分の経験と結びつけて考えさせる発問をする。生徒自身の経験と照らし合わせて考えたことをノートにまとめ、皆の前で発表する活動を通じて、生徒は多様なものの見方に気付くことができる。

・ 生徒が「分からない」と応答（返答）したときは、「何が分からないか」という質問を重ねる。生徒と教授者とのやりとりそのものがコミュニケーション活動となる。

イ 応答（返答）の扱い方についての留意点

生徒の応答（返答）を指導者の都合で言い換えないよう注意する。生徒は意見を聞いてもらえないという気持ちを抱き、積極的な発言を控えるようになることもある。生徒の応答（返答）を他の生徒と

分かち合い、互いに考えを深めることができるよう配慮する。

コラム⑥【ファシリテーションのコツ】

グループワークではファシリテーター（促進者）が担う役割が重要である。この際のコツは次のとおりである。

- (1) グループ全員が意見を言えるように配慮する（意見を引き出す）*1
 - (2) 戸惑っている人などをサポートし意見を整理する（理解を助ける）*2
 - (3) 話の脱線や理解のズレに対処する（軌道修正する）*3
 - (4) 時間配分に注意して時間内に意見をまとめられるようにする（結論を促す）
- *1 発言については、「意見のある人から」、「順番を決めてなど工夫できる。
 - *2 模造紙などを使って、文章や図（シンキングツール等）で端的にまとめられると分かりやすい。
 - *3 「残り時間が心配です。テーマに戻りましょう」や「そうですね、〇〇についてですが…」など、話題を切り換えるときは、場の空気を考えた対応も必要である。

(三) 板書等の工夫

ア 学習目標の明示

生徒は板書によって授業の目標を確認し、授業展開を視覚的に捉えることができる。板書は生徒の考察、批評、共感の表れであり、生徒集団に共有された授業内容を示したものとなる。特に学習目標が授業終了まで見える板書にしておくのがよい。一時間の中で黒板を消す動作があつたとしても、目標は残しておくようにする。

イ 板書を用いた学習活動

生徒が自分の考えを板書する活動があるとよい。一つの問いに対して複数の生徒が自分の考えを書く機会があれば、思考の比較ができる。小型ホワイトボード又はシートを使うと、生徒は書き込みをしやすく、指導者はそれを動かして整理することができる。また、シートを基に話し合い、考察を深めるといふ発展的な授業を行うことも可能になる。板書をする準備も含めて、生徒は考察、構成、記述、振り返り、推敲、交流という学習活動を行うことになる。

ウ ICT機器の利用

要点を素早く確認させたり、主体的な学習活動の手だてとして活用したりする目的であるならば、時間短縮に効果的なICT機器を利用するとよい。ICT機器の発達により、今後更に利用価値が高まっていく（詳細は第七章）。

(四) 学習の記録

学習の定着を図り理解を深めるために、生徒が自らの学習過程や成果を記録に残すことは重要である。従来はノートによる記録が一般的であつたが、さまざまな方法が考えられるので、状況に合わせ

て柔軟な発想で対応するとよい。

ア ノートの活用

ノートは生徒の理解の程度を表すものである。特に予習の記録には、生徒自身の事前理解が明示される。また、学習内容の記録でもあるので、授業を理解できたかどうかの目安にもなる。更に、家庭学習の折に授業の内容を振り返ることもできる。指導者が基本的なノートのつくり方を助言するとよい。例えば、指導者の質問や自分の考え、気付き、疑問などをペンの色を工夫して書きとめたり、付箋を利用してノートの中に蓄積したりするなど、板書されないことも記録に残すことは、社会に出てからも役に立つ整理法である。しかしながら、理解の仕方は人それぞれであるので、基本的な技術は伝えた上で、生徒個々のスタイルを認めることも大切である。

イ ワークシートの活用

ワークシートをファイリングしていく記録の仕方もある。ワークシートには成果物だけでなく、ルーブリックや振り返りなども載せてあると、ポートフォリオとして活用することができ、生徒自身が学習経過、成果、評価までを自覚できるという利点がある。

ウ ICT機器の活用

ICT機器はノート代わりに使うこともできる。例えば、ポートフォリオを紙ではなくICT機器を使って記録することで、紙による煩雑さを省くことができる。また、学習の記録をデータ化することで指導者との共有が簡単になるという利点がある。学習支援ソフトウェアを用いたポートフォリオ評価につなげることもできる。

(五) 家庭学習の指導

変化の激しい社会では、生涯を通じて学び続け、学びを自らの生活に生かす態度を養うことが求められる。

本を読むことは、思考を深め、教養を身に付けるのに役立つばかりでなく、知識や情報を収集し、活用する力を養う基盤ともなる。さまざまなジャンルの書物を、継続的に読んでいくことが重要だと気付かせたい。

また、学習指導要領においても、学習意欲の向上や学習習慣の確立を重視している点も考慮して、生徒の学習環境が多様化する中で、家庭学習が定着するよう指導の工夫をする必要がある。

ア 読書を勧める指導

授業の中で、指導者の読書経験を基に、教材に関連する書籍の紹介をする。

・ブックトークやビブリオバトルなど、生徒が読書の経験を発表し、生徒集団で共有する活動を行う。

・司書教諭等と連携し、図書室の利用促進を図る。

・新聞、雑誌、インターネットの情報をもとに批判的に読むこと（クリティカルリーディング）の必要性を教える。

・読書体験を、読書感想文にまとめさせる。感想を文章化する中で、生徒は読みを深めることができ、コンクールに参加することによって、読書へのモチベーションも上がる。

・読書日記（書名、作者名、読んだ期間、一言感想文などを記す）を勧める。

イ 課題についての指導

短期間に与える課題（日常の課題等）の留意点

- ・ 予習・復習は、目的を明確にした上で指示を出す。予習の目的は、「何が分からないか、できないか」を自分自身で知ることであり、復習の目的は、授業を経て、予習段階で分からなかったところが分かったか、新たに課題意識をもてたかを確認することである。
- ・ 家庭での学習の仕方を教える。家庭学習のプロセスが分かるようなワークシートを作成し、事前に配付してもよい。

長期間に与える課題（長期休業中の課題等）の留意点

- ・ 明確な目的のある、時間を要する課題（図書館などを利用して調査が必要な課題など）を提示する。
- ・ 生徒の学習のプロセスと成果が分かりやすいものにする（決められたテーマについてのレポートなど）。

（六）節度ある活性化

授業においてまず必要なことは、目の前の生徒集団の特性を知り、それに応じたルールを早期につくることである。そのルールについては、必ず指導者と生徒との間で共通認識をもつようにする。

また一つの正解を追究する授業ではなく、多様性を認め合う授業を展開するよう心がけたい。誰もが自分の考えを安心して自由に表現でき、互いにそれを受け止めることができる協働的な学びの場をつくるのがよい。

- ・ 少数の意見を受け入れる雰囲気をつくる。
- ・ 自分の考え、発言に責任をもたせる。発言時に理由を添えて述べるよう指導する。
- ・ 一人が発言しているときは他の人は話をしない（グループワークにおいても同じ）。また発言はクラス（グループ）全員に聞こえるよう指導する。

るよう指導する。

- ・ 生徒の様子を見て、集中力が切れてきたと感じたら、活動の種類を変更する（聞く↓話す等）。
- ・ 自らの判断で選択できる課題（好きな詩や俳句を選んで鑑賞文を書くなど）を与える。

◆ 参考資料 ◆

- 町田守弘『国語科 授業構想の展開』三省堂 二〇〇三年
 川本信幹『魅力ある国語の授業を創る』東京書籍 二〇一〇年
 益地憲一編著『中学校 高等学校 国語科指導法』建帛社 二〇一三年
 日本国語教育学会監修『国語科単元学習の創造』東洋館出版社 二〇一三年
 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』東洋館出版社 二〇二二年

コラム⑦【グループワークの手法Ⅲ KJ法】

話し合いで出された多くの意見やアイデアを整理してグループ化し、問題解決の道筋を明らかにしていくための手法。意見やアイデアは、一つずつカードなどに書き出していく。

実施方法

〈カードの整頓・グループ化〉

- ① 意見が書かれたたくさんカードをバラバラに広げる。
- ② 関連性や類似性のあるカードを束にしていき、小グループをつくる。関連性のないカードはそのままにしておく。
- ③ 小グループごとに、共通していることを見出しにして「表札」を付ける。
- ④ 小グループの「表札」を見て、更に互いに親近性のあるグループを束ねて、中グループをつくる。
- ⑤ 「④」の作業を繰り返し、十近くの大グループに束ねることができたら、グループ化の作業を終了する。
- ⑥ 大グループにも「表札」を付ける。「⑤」の作業と並行しながらでもよい。

〈論理的整序・空間配置と図解〉

- ① 大グループ化されたカードを机の上に並べる。
- ② グループ間に論理的な関連性ができるように並び替える。(この作業を「空間配置」という。配置の意味する内容を、ストーリーのようにつないで話せるようにする、というのがポイント)。
- ③ 「空間配置」ができたなら、カード束の間隔を広げ、それぞれ中グループまでほぐす。その上で、元のグループの範囲内で、隣り合う他のグループとの親近性に注意しながら、中グループでの「空間配置」を行う。
- ④ 「空間配置」したカードを線でつないだりグループを線で囲んだりして、関係性が分かるように「図解化」する。
- ⑤ 「図解化」する際、因果関係、相互関係、対立関係、原因と結果などの関係性が分かるように、線の色や形を変える。(線の色や形は、全体で統一しておく)。

〈文章化〉

- ① カードに書かれている言葉をできる限り使って、グループごとに一つの文章につなげていく。
- ② グループごとにつなげた文章を、更につなげて文章化する。

〈まとめ〉

図解や文章化したものなどを見ながら、これらのことから考えられる内容やどのグループのものが最も重要かなどの発表を行い議論を深めるとともに全体の理解と共有を図る。

第三章 「話すこと・聞くこと」の指導

一 話す力・聞く力

ここでいう「話す力」とは、日常的なコミュニケーションを円滑に行う力に加えて、公の場において、初対面の人や互いによく知らない人、自分と考えの異なる人などに、意見や考えを正確に伝える力のことである。「話す力」には、話題を提示する順番や方法、間の取り方、聞き手の反応への応じ方なども含まれる。自分の主張を相手に押し付けたり、相手を論破したりする力が「話す力」なのではない。話し手と聞き手が意志の疎通を図り、互いの意図や考えを十分に理解し合えるような「話す力」「聞く力」が求められる。したがって、「話す力」を育むには「聞く力」を高めることが同時に必要となる。

二 「話すこと・聞くこと」の指導

共通必修科目の「現代の国語」においては、「話すこと・聞くこと」を主とする指導に二十〜三十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導をするよう、学習指導要領に定められている。なお、指導事項としては、次の五点が挙げられている。

ア 目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検

討すること。

イ 自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。

ウ 話し言葉の特徴を踏まえて話したり、場の状況に応じて料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の理解が得られるように表現を工夫すること。

エ 論理の展開を予想しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。

オ 論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、話合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

なお、「現代の国語」以外には、「国語表現」において「話すこと・聞くこと」を主とする指導に四十〜五十単位時間程度を配当するものとされている。内容は、「現代の国語」の指導内容を踏まえ、更に発展させた指導事項になっている。

三 言語活動例

「話すこと・聞くこと」の指導事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導する。

ア 自分の考えについてスピーチをしたり、それを聞いて、

同意したり、質問したり、論拠を示して反論したりする活動。

・新聞のコラムや社説などを読み、内容とそれについての自分の考えを分かりやすく説明する。聞き手は相づちを打ったり、よく理解できなかったことを質問したりする。

・学校の魅力を伝えるためのスピーチをして、聞き手は適切に評価する。

イ 報告や連絡、案内などのために、資料に基づいて必要な事柄を話したり、それらを聞いて、質問したり批評したりする活動。

・地図に書かれている場所や目的地までのルートを口頭で説明する。聞き手は明確に示されなかったことを質問する。

ウ 話合いの目的に応じて結論を得たり、多様な考えを引き出したりするための議論や討論を、他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。

・文章を読み比べ、ワールド・カフェ形式で共通点や相違点などを話し合い、一つのテーマについて考えを深める。

エ 集めた情報を資料にまとめ、聴衆に対して発表する活動。

・グループごとに理想の修学旅行について考え、言葉と図表の割合

を考えながら、フリップ、ポスター、スライドなどを作成して発表する。

コラム⑧ 「グループワークの手法Ⅳ ワールド・カフェ」

カフェで寛いでいるようなリラックスした状態で特定のテーマについて話し合う手法。話す人はトーキングオブジェクトを手に持って話す。一般的に、時間や人数などに決まりはない。

〈準備物〉

模造紙、ペン、トーキングオブジェクト（ボール、ぬいぐるみ、お手玉、ペンなど）

〈実施方法〉

- ① 四〜五人単位の小グループでテーブルにつき、特定のテーマについて話し合う。
- ② ホスト一人を残し、自由に席替えを行う。ホストは前のグループの話し合いを説明し、同じテーマで話し合う。
- ③ 何度か席替えを繰り返してから、最初のテーブルに戻り、移動先で得た話し合った内容や得た情報などとともに、さまざまな意見やアイデアを出し合う。
- ④ 参加者全体での話し合いの場をつくり、それまでに出てきたアイデアや意見を全員で共有する。

コラム⑨ 【情報の扱い方】

	現代の国語（解説 P. 77～）	論理国語（解説 P. 150～）
	(2) 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	
情報と情報との関係	ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。 イ 個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。	ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。
情報の整理	ウ 推論の仕方を理解し使うこと。 エ 情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。 オ 引用の仕方や出典の示し方、それらの必要性について理解を深め使うこと。	イ 情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。 ウ 推論の仕方について理解を深め使うこと。

今回の学習指導要領の改訂において、「知識及び技能」に新しく「情報の扱い方に関する事項」が設定された。詳細は上の表のとおりであるが、特に、情報の妥当性や信頼性については、正しく吟味する力が必要である。

情報の妥当性には、その情報が正しいものであるということに加えて、その情報を根拠として挙げる場合などに、根拠としての適切さを欠いていないことが必要となる。情報の信頼性は、その情報が確かなものであるかどうかを出典の示し方から確認するだけでなく、誰が、いつ、どこで発信したものを確認することも重要となる。

また、ウェブサイトを引用する場合についても、アドレスや閲覧日を示すなど、引用元に遡って確認できるように明示することが重要である。

四 授業の際の留意点

授業をする際には、次の点に留意するとよい。

- (一) 全生徒が活動できるようにする。
- 他の生徒と積極的に関わることができない生徒と、関わりの苦手な生徒とがいる。関わるのが苦手な生徒にはできるだけ配慮し、話し合いや意見交換の活動をするときには、組み合わせやグループづくりの気を配りたい。引っ込み思案な生徒には、その生徒の発言を待つことができ、その生徒がうち解けやすい生徒と仲間になるようにするとよい。
- (二) 人と話すこと、人前で話すことに対する抵抗感をなくす。
- 前述(一)とも関連するが、人と話をするのが苦手な生徒もいるだろう。また、友達同士で話すことは苦にならなくても、いざ人前で話すとなると二の足を踏む生徒もいる。そういう生徒には、声を出すことに対する抵抗感を取り払い活動から始めるとよい。まず、前後左右の席の生徒同士で、指導者の発問に対する意見を交換させる。その際、始めから深い思考や判断を要する発問を避けることは避け、誰でも簡単に答えられそうな発問を投げかけるとよい。コミュニケーションを促す簡単な発問を繰り返し、生徒が自分の考えをためらわずに話せる雰囲気をつくる。その後グループを大きくし、徐々に人前で話すことに慣れさせていく。授業の冒頭で、「クラスの仲間にしつかり聞こえる声で話す」という最終目標を示し、生徒と共有しておくことも大切である。

(三) どのように話せば分かりやすくなるかを考えさせる。

「聞く人に分かりやすく話して伝える」ために特に必要なことは、次の二点である。

ア 話す内容

話す前にワークシートや原稿、メモなどをつくり、話す内容を精査させる。話す順序や内容を整理するためのワークシートを生徒に提示し、論の展開がスムーズになるよう留意させる。

イ 話し方

声の大小、口の動かし方、抑揚のつけ方などさまざまなポイントを挙げるができる。しかし、よって、まずは「早口にならず、大きな声で話す」ように指導するのがよい。話す速さは、三〇〇字の原稿を一分程度で読むくらいがちょうどよいと言われている。

また、話すときには聞き手を見て話すようにさせるとよい。原稿やメモがあると読み上げてしまいがちだが、話す内容を届けるためには、聞き手の目を見、反応を捉えながら話すことが大切である。時には身ぶり手ぶりを交えてもよい。

(四) どのように話せば説得力が増すかを考えさせる。

前述(三)アとも重複するが、まずは論を分かりやすく展開することが求められる。その上で更に説得力を増すためには、効果的な具体例を挙げることが肝要である。聴衆にとって身近で、イメージしやすい具体例を挙げること、話し手が伝えたい趣旨をより分かりやすく伝えることができる。また、文末を「だ・である」にすると、言葉の調子が強くなる。このような工夫や効果を知り、自分の

スピーチや発表に活用させたい。

(五) どのように聞けば話が分かるかを考えさせる。

興味・関心をもって聞くのは言うまでもなく、「相手の言いたいことは何か」を常に念頭に置いて聞く姿勢をもたせることが大切である。今は何の話をしているのか、この具体例は何を説明するために用いているのかなどを、頭の中で考えながら聞くようにさせる。

(六) メモを取りながら聞く方法を身に付けさせる。

スピーチの長さによつては、話題が多岐にわたることがある。それを漫然と聞いていても、終わったときに頭に何も残らない。そのために、メモを取りながら聞く習慣を身に付けさせる。授業においても、体育館などで聞く講演会でも、同様である。生徒の実態に合わせた資料の用意が「聞く」ことの質を高めることになるので、次のような工夫をするとよい。

ア 評価シートを配付する。

評価の観点を示し、どのような点に注意して聞く必要があるかを把握させる。また、メモ欄を作り、発表を聞きながら書き込ませる。

イ レジューメを配付する。

枠や野線を使ってレジューメに書き込みスペースを作っておき、説明を聞きながら書き込ませる。

ウ スライド資料を配付する。

プレゼンテーションソフトウェアを使う場合は、書き込みができるようにしたスライド資料を印刷して事前に配付しておく。余白部分に、口頭での説明をメモさせる。

五 評価の際の留意点

評価の観点からいうと、「読むこと」や「書くこと」の評価に比べて、「話すこと・聞くこと」は評価がしにくいと考えられがちである。一人一人のパフォーマンスを見たり聞いたりする必要があり、評価に多くの時間を要すると考えられるからだ。そこで、短時間で適切な評価ができるように、生徒同士の評価を授業評価の参考にするための評価シートの作成や、授業展開の方法を工夫する必要がある。どのような指導案をつくるかが重要である。

コラム⑩【ワークシートの作成の仕方】

ワークシートを用いることで、よりスムーズに授業を展開することができる。また、ワークシートを評価材料に用いることもできる。そこで、効果的なワークシートの作成についてまとめておく。

ワークシートを作成する際、次の三点を達成できるものを用意するとよい。

- ① 学習者の思考の道筋を手助けできること
- ② 学習者が見返したときに復習しやすいこと
- ③ その学習の要点が分かること

ノートでは書き込み位置が指定しにくい問いでも、ワークシートでは容易である。文のつながりが見え、全体の理解ができ、

視覚的にも分かりやすくまとまるワークシートが理想である。

作成に当たって、ワークシートを実際に使う生徒の作業の流れをよく想定することが大切だ。生徒の学習段階や実態を見極め損なうと、穴埋めをするだけになってしまふ。目的を明確にし、それが達成できるかどうかを常に心がけたい。

以下に、ワークシートの例を挙げる。

- ① 掲載された本文のキーワードを囲んでいき、つなげることで流れを追うことができるもの。
 - ② 対比関係にあるものを表に抜き出し、データチャートとして構造をつかむことができるもの。
 - ③ 心情描写のみを抜き出し、人物の認識の変化を追うもの。
 - ④ 柱となる問いに対する自分の問いや同級生の答えを書き込み、自分の考えを相対化するもの。
- インターネット上にも多くのワークシートが公開されているので参考にすることができるが、授業の目的に合っているか、吟味した上で使用することが肝要であろう。

【参考資料】※インターネット上に公開されているもの

加古有子「文学的文章教材の読みを深めるワークシートの提案」

「愛知教育大学院国語研究」二〇一九年

北村拓也「シンキングツールを利用した国語力を高める授業づくり」「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要」二〇一一年

第四章 「書くこと」の指導

一 「書くこと」の指導

言葉は自分と他者をつなぐ大切なコミュニケーションの道具である。しかし、言葉は思いに足りないものであることも実感する。だからこそ、できる限り相手に伝わる表現をしようと心がけることが重要である。

文章によって何かを伝えようとする際には、時間をかけて内容を吟味したり、適切な表現を探し求めたりする。その過程で自分の思いや考えが整理され、深まるのである。こうして書かれたものは形に残り、時間を置いて読み返すことができる。そうすることで新しい発見や、感慨が生まれることもある。

学習指導要領にある高等学校国語科の目標のうち、「書くこと」に直接関わるのは、「国語で的確に理解し効果的に表現」する能力の育成と、「伝え合う力を高め」ることである。「書くこと」に関する指導事項は、「現代の国語」「言語文化」「論理国語」「文学国語」「国語表現」の内容に記されている。

二 「書くこと」の指導

「書くこと」の指導によって思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を豊かにすることで、「書くこと」のみならず「話すこと・聞くこと」「読むこと」の力を高めることもできる。また、逆に「話すこと・聞くこと」「読むこと」の力を伸ばすことにより「書くこと」

の力も高まる。このような相乗効果を念頭に置いて指導をしたい。

(一) 現代の国語

必修教科目の「現代の国語」においては、「書くこと」を主とする指導に三十〜四十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導をするよう、学習指導要領に定められている。なお、指導事項としては、次の四点が挙げられている。

- ア 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすること。
- イ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫すること。
- ウ 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や、文体、語句などの表現の仕方を工夫すること。
- エ 目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

(二) 言語文化

必修教科目の「言語文化」においては、「書くこと」を主とする指導に五十〜六十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導をするよう、学習指導要領に定められている。なお、指導事項としては、

次の二点が挙げられている。

ア 自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。

イ 自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫すること。

選択科目「論理国語」においては、「書くこと」を主とする指導に五十〜六十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導をするよう、学習指導要領に定められている。指導事項は、必修科目「現代の国語」を発展させた内容である。題材の設定においては「実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること」とあり、また、情報収集においては「自分の立場や論点を明確」にすること、構成の検討においては「立場の異なる読み手」によって「批判的に読まれることを想定」するなど、自らの主張を形成し、記述するために、それぞれの「立場」を明確化することが指導事項として示されている点に留意したい。

選択科目「文学国語」においては、「書くこと」を主とする指導に三十〜四十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導をするよう、学習指導要領に定められている。指導事項は必修科目「言語文化」を発展させたものであり、自らの表現の工夫や特長を客観的に認識するために、「文章の構成や展開、表現の仕方などについ

て、伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。」といった学習活動（自己評価・相互評価）が指導事項として挙げられている点に留意したい。

選択科目「国語表現」においては、「書くこと」を主とする指導に九十〜百単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導をするよう、学習指導要領に定められている。指導事項は、必修科目「論理国語」「言語文化」を発展させた内容であるが、「読み手の同意」や「読み手の共感」を得る工夫が指導事項に含まれている点に留意したい。

三 言語活動例

「書くこと」の指導事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導する。

「現代の国語」

ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する活動。

・新聞や裁判の記録から情報を収集、整理し、社会における問題を提起して自分の意見を書く。

「言語文化」

ア 本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで、随筆などを書いたりする活動。

・新古今和歌集を参考に本歌取りの表現方法について理解した後、自分の好きな詩歌（歌詞などを含む）の語句、趣向を取り入れて短歌を創作する。

「論理国語」

イ 設定した題材について、分析した内容を報告文などにまとめたり、仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめたりする活動。

・「言葉の変化、揺れ」に関して、文化庁の「国語に関する世論調査」やメディア、辞書から情報を収集、整理し、時代とともに移ろう言葉について報告文を書く。

「文学国語」

イ 登場人物の心情や情景の描写を、文体や表現の技法に注意して書き換え、その際に工夫したことなどを話し合ったり、文章にまとめたりする活動。

・「舞姫」の「エリスと初めて出会ったとき」の場面について、情景描写に主人公の心情を重ね合わせたり、既習の修辭法を用いて書き換えたりしたものを相互評価する。

「国語表現」

エ 紹介、連絡、依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動。

・自分の読んだ小説、エッセイ、絵本、図鑑、詩集などの魅力を、キヤッチフレーズや挿絵を工夫してカードやポップを作り、紹介する。

四 授業の際の留意点

「現代の国語」において、説明文・意見文を書くときの手順に従って、指導の際の留意点を示す。

「現代の国語」

(一) テーマを決める

実社会に目を向けさせ、適切な題材を生徒自身に決めさせたい。その際、指導者がある程度の範囲を示し、例示するとよい。

(二) 資料を集める

新聞、雑誌、本、写真などの資料だけでなく、記憶や経験も貴重な材料となる。また、ウェブページを利用した情報収集は手軽であるが、情報の発信者やその情報の真偽を確かめる必要がある。学校や地域の図書館に足を運び、書籍や新聞等、別の情報源と照らし合わせるなど、複数の資料を集めるように指導したい。

(三) 構成を考える

説明文・意見文では「頭括型」や「序論・本論・結論」などの構成を用いることで、論旨が明確になり、意見や主張に説得力をもたせることができる。ワークシート等を用い、論の流れや内容を整理させるとよい。

(四) 表現を工夫する

対比する、具体例を示す、類似の例を挙げる、反例を挙げて否定するなどの工夫によって、より説得力のある主張ができる。

また、考えを正確に伝えるために、複数の国語辞典や類語辞典、用語集等を活用させるとよい。

(五) 推敲する

よい文章を書くには推敲が必要である。ひととおり書き上げたら、読み返して文意の通じないところがないか確認させる。複数で互いに読み合う活動を行うのもよい。自己評価や相互評価を通じて、作品が洗練されるばかりでなく、書く能力そのものを高めることができる。

「文学国語」において、文学的な文章を書くときの手順に従って、指導の際の留意点を示す。

「文学国語」

(一) テーマを決める

創造的に考えることができるように、適切な題材を生徒自身に決めさせたい。その際、指導者がある程度の条件を示し、例示するとよい。

(二) 資料を集める

ウェブページの他に、修辞法に関する資料ならばレトリック事典などを活用するのが簡便である。また、自分が感動した文学作品や、自分の好きな作家の文体や修辞法に改めて触れたり、日本の古典文学ではどのような表現方法が主に用いられているのか参考にするのもよい。

(三) 構成を考える

文学的文章では「起・承・転・結」や「序・破・急」などの構成を意識させることで、展開にストーリー性をもたせることができる。ワークシート等で、展開を整理させるとよい。

(四) 表現を工夫する

倒置法・比喩・対句・体言止め・反復法・押韻・擬人法といった修辞法によって独創的な文章を書くことができる。また、登場人物の心情を情景で描写することも、文学的表現において効果的である。

(五) 推敲する

文学的な文章を書くとき、独り善がりのものになってしまい、読み手の共感を得られなかったり、意図した内容がうまく伝わらなかったりすることがある。相互評価を通して自分の作品を練り直し、洗練された文章に高める活動をさせたい。

五 評価の際の留意点

評価をする際、指導者は生徒作品の全ての面を評価対象とする傾向があるが、指導事項に沿って、評価のポイントを焦点化することが大切である。「指導したことについて評価する（指導と評価の一体化）」という姿勢を確認したい。

コラム⑩【シンキングツール】

学習活動やグループワークで活用できるシンキングツールには、次のようなものがある。

(1) **座標軸**（比較する・順序を付ける）

↓対象を二つの軸で整理するときを使う。意見の位置付けを明確にする。

(2) **ベン図**（比較する）

↓複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。

(3) **Y/X/Wチャート**（分類する・多面的に見る・多角的に見る）

↓複数の対象について、ある視点から共通点のあるものをまとめる。また、対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。Yは三つ、Xは四つ、Wは五つの視点がある。

(4) **イメージマップ・ウェビング・マインドマップ**（関連付ける・広げる）

↓複数の対象が、どのような関係にあるかを見つける。ある対象に関係するものを見つけて、増やす。

(5) **フィッシュボーン**（見通す・結果を予想する・多面的に見る・多角的に見る）

↓解決すべき問題などをトピックとし、頭の部分に書き入れる。トピックについて、要因を分析する。

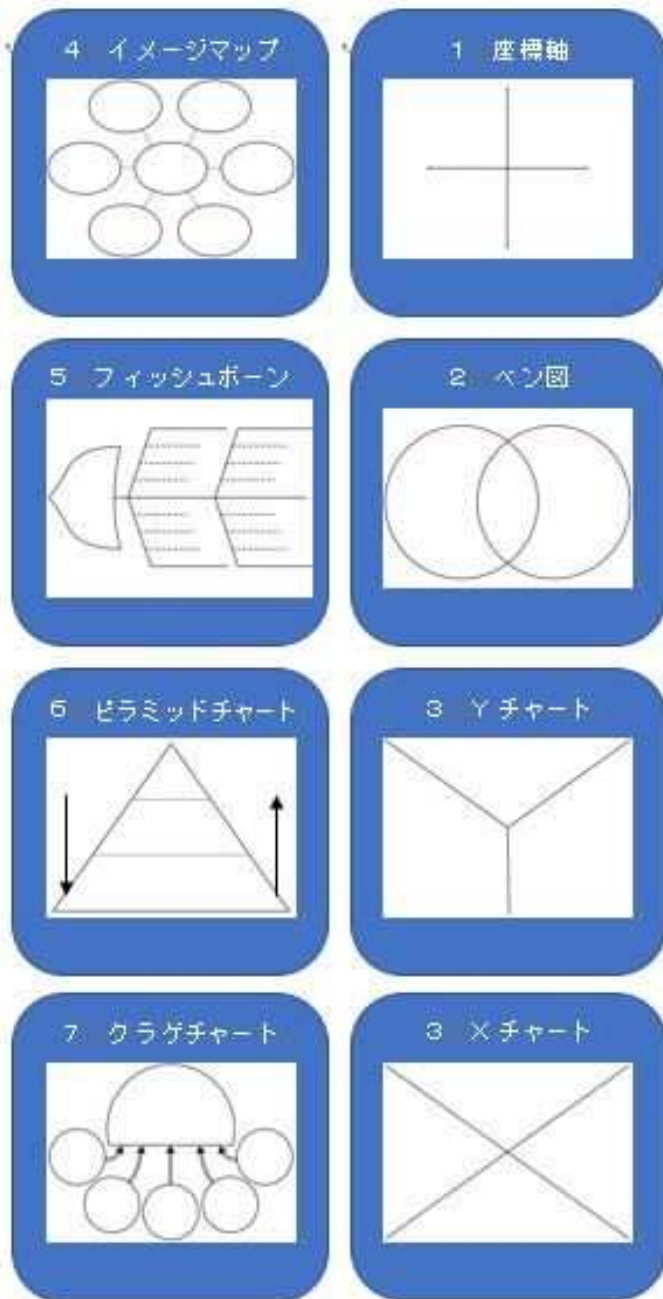
(6) **ピラミッドチャートA・上から下へ（演繹）**（具体化する・個別化する・分解する）

↓主張（頂点）とその理由、更に理由の根拠を構造的に捉える。ピラミッドの上から下へ向かって情報を整理する。

ピラミッドチャートB・下から上へ（帰納）（抽象化する・一般化する・統合する）

↓集めた情報を抽象化して、主張へと導く。ピラミッドの下から上へ向かって情報を整理する。
(7) クラゲチャート(理由付ける)

↓対象の理由や原因、根拠を見つかったり、予想したりする。



ここに挙げたものが全てではない。活用できそうなところだけをピックアップして行ったり、いろいろな手法を組み合わせたり、自分なりのやり方を模索したりするのもよい。また、自分なりのやり方を発見できたときには、研究授業などに取り入れて、他の先生方と情報を共有してほしい。

第五章 「読むこと」の指導

一 読む力

人間は五感を通じた体験を積み重ねることで自分を取り巻く世界を理解していく。そして、言葉、特に他者の言葉を通じて世界をより深く理解していく。

経験や知識、価値観といったものが完全に同じ人間は存在しない。そうしたものが異なると、同じ対象を前にしても、そこから受ける印象が異なってくる。つまり、他者は自分とは異なる視点で世界を見ており、それに基づいた他者の言葉は、その人にだけ見えている世界の一面を表現している。よって、他者の言葉に触れることは、自分がまだ体験したことがない世界の新しい一面に触れることを意味する。そうした言葉を通じた新しい体験が積み重なると、自分を取り巻く世界への理解、具体的に言えば、人間、社会、自然などに対する見方、感じ方、考え方がより深まっていく。

こうした体験を文字を通して行うことが「読むこと」である。文字を媒体として、過去に存在した人間が感じたこと、考えたことに触れたり、複数の文章を読み比べることによって、共通点や相違点を理解したりすることで、自らの考えを深めることができる。「読むこと」とは、文字という媒体を通じて、自分を取り巻く世界への理解を深める行為を指す。そして、「読む力」とは、文章などを読むことによって書き手の意図を的確に捉え、自分の考えを豊かにすることを指す。

二 「読むこと」の指導

(一) 「現代の国語」

共通必修科目の「現代の国語」においては、「読むこと」を主とする指導に十〜二十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導するよう、学習指導要領に定められている。教材については、「現代の社会生活に必要なとされる論理的な文章及び実用的な文章」としている。なお、指導事項としては、次の二点が挙げられている。

- ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握すること。
- イ 目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めること。

選択科目「論理国語」の指導事項は、「現代の国語」の指導事項を発展させた内容である。教材については、「近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要なとされる実用的な文章。また、必要に応じて、翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができる」としている。なお、指導には八十〜九十単位時間程度を配当し、計画的に指導するよう定められており、必要に応じて近代以降の文章の変遷を扱うようにすることも付け加えられている。

(二) 「言語文化」

共通必修教科目の「言語文化」においては、「読むこと」の古典に関する指導に四十〜四十五単位時間程度を配当することとなっている。その際「古文と漢文の割合は、一方に偏らないようにする」、「古典について解説した近代以降の文章を活用する」となっている。近代以降の文章に関する指導については、「二十単位時間程度配当し、教材については、「古典及び近代以降の文章とし、日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに、我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう、我が国の伝統と文化や古典に関する近代以降の文章を取り上げること。また、必要に応じて、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができる」としている。なお、指導事項は、次の五点が挙げられている。

- ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。
- イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。
- ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。
- エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。
- オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

選択科目「文学国語」の指導事項は、「言語文化」の指導事項を発展させた内容であるが、教材については「近代以降の文学的な文章とすること。また、必要に応じて、翻訳の文章、古典における文学的な文章、近代以降の文語文、演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができる」としている。なお、指導には百から百十単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導するよう定められている。

選択科目「古典探究」の指導事項は、「言語文化」における古典に焦点を当て、発展させた指導内容であり、教材については「古典としての古文及び漢文とし、日本漢文を含めるとともに、論理的に考える力を伸ばすよう、古典における論理的な文章を取り上げること。また、必要に応じて、近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができる」としている。なお、「古文と漢文の両方を授業で取り上げるものとし、一方に偏らないようにすること」、「必要に応じて、古典の変遷を扱うようにすること」が付け加えられている。そして、「読むこと」の一領域であるため、授業時数は示されていないが、古典を読み深めるための「音読、朗読、暗唱」などを取り入れることが記されている。

三 言語活動例

小中学校では、報告、論説、報道、記録などさまざまな種類の文章に触れ、学校図書館の利用やインターネットなどから情報を収集する学習活動を経験してきている。高等学校では、それを踏まえ、複数の関連する文章や図表などを伴う文章を読み比べる学習を通し

て、多様なものの見方や考え方を知り、理解を深めるとともに、それぞれの要旨や要点を的確に捉え、生徒自身の考えを更に発展させることが望まれている。また、「読むこと」の資質・能力を育成する上で、論述したり批評したりする活動や討論したり発表したりする活動、まとめたり書き換えたりする活動など、生徒自身の考えを表現する言語活動は、読みを深めるためにも必要なことである。「読むこと」の指導事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導する。

「現代の国語」

イ 異なる形式で書かれた複数の文章や、図表を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動。

・同じ題材を扱った新聞記事やエッセイを読み比べ、グループの中で発表し合う。

「言語文化」

ウ 異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

・「羅生門」と「羅城門（『今昔物語集』）」とを比較し、異なる点や作者の意図の違いなどを話し合う。

「論理国語」

エ 同じ事柄について異なる論点を持つ複数の文章を読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

・同じテーマをもった対照的な説明文を比較検討しながら要旨をまとめ、他者と意見交換することにより理解を深める。

「文学国語」

イ 作品の内容や形式に対する評価について、評論や解説を参考にしながら、論述したり討論したりする活動。

・「山月記」と「人虎伝」を比較した論文などを読み比べ、筆者の意図について討論し、自分なりの見解をまとめる。

「古典探究」

イ 同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。

・「道長、伊周の競射（『大鏡』）」と「大納言殿まゐりたまひて（『枕草子』）」を読み比べ、書き手の意図の違いを考察し論述する。

四、授業の際の留意点

中央教育審議会答申（二〇一六年一月二二日）において、「現行学習指導要領の成果と課題」として、次のように示されている。

高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に応用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

「読むこと」の授業において、注意しなければならないことは、指導者の用意したものをそのまま正解とし、生徒が指導者の見解や解答を待つ、受け身の状態になってしまうことである。教材を正しく読み取らせ理解させることは大切なことであるが、「目の前にいる生徒に身に付けさせたい資質・能力は何であったのか」と、問われるような授業は避けたい。もちろん、言語活動を生徒にやらせるだけの授業も同じことである。

以下に文章の種類によって分類した指導法を示しておく。

(一) 論理的な文章の指導法

ア 読解の基礎

論理的な文章を学習する基本は、文章の展開を丹念にたどって論旨を読み取り、筆者の主張を的確に把握することである。そのためには、まず語句の意味を正しく捉え、接続詞の働きを理解するといった読解のための基礎を習得させる必要がある。

イ 読解の進め方

論理的な文章ではキーワードやキーセンテンスに気を付けて、本文に傍線を引きながら読むことが理解につながる。また、対比表現や接続詞をチェックして、文や段落相互の関係を考えながら読み進めさせることも重要である。さらに、その論の展開において、どのような具体例から抽象化が行われているかという、具体と抽象に注目させることによって、筆者の主張を的確に読み取らせることができる。

ウ 読解を深める

読解が進んでからは、論の展開を図示したり、表にまとめたりして、より明確に文章の構成を理解させるとよい。また、要約文などを作成して、主題への理解を深めさせることもできる。そして、筆者の主張を理解し、自分の問題として発展させていくためには、理解した内容を自分の言葉で表現させることが効果的である。身近な話題や体験、また時事問題などから取材し、表現の工夫や論の展開方法をまねて作文や小論文を書かせたり、ディベートを行ったりして考えを深めさせることができれば、読解によって筆者から学んだ視点を自らの思考の中に取り入れていくことができる。さらには、筆者の論理の展開やその根拠となる箇所に疑問がないか、筆者の主張に対して自分はどう考えるかという批評をさせることで、生徒の論理的思考力、表現力をより高めることができる。そして、そのよ

うな批評を行う際には、同じ対象について異なる主張を展開している文章を複数参照させるといふ学習活動が効果的である。

(二) 文学的な文章の指導法

ア 人物像・場面の把握

授業は限られた時間の中で行われるため、必ずしも作品の全てを教材として扱えるわけではない。書き出しが載っていない場合や結末が載っていない場合、途中から途中までの場合さえ珍しくない。

そのような中でいかに作品の世界を捉えるか。まずは設定(背景)を丁寧に確認することがカギとなる。設定(背景)とは、登場人物の性別・年齢・職業・家族構成・交友関係や、作品の時代・場所・季節・時間帯・天候などのことである。作品の世界観をつくる材料であり、書き手の意図が表れるものだ。散りばめられている材料に気付けるほど、以後の読解がスムーズとなるのは間違いない。

こうして、「登場人物はどのような状況下で生きているか」に着目させることで、思考過程・行動目的・発言意図を捉えやすくなり、登場人物に対する理解がより深まるのである。

また、本文に添えられている状況説明(あらすじ)も軽んぜず精読すべきである。全体の展開における当該部分の位置付けが明確になってくるからである。

イ 心情の分析

作品を読みながら自らと登場人物を重ね合わせ、考え方・生き方に共感したり反発したりすることは、生徒の心情を豊かにする上で大変意義がある。

しかし、「なんとなく」「たぶん」というような曖昧な理由で自

分勝手に解釈することは避けさせたい。それでは登場人物の心情を想像で決めつけることになってしまい、一人一人異なる人生経験に作品が引つ張られてしまうからだ。よって指導者は、恣意的にならない読解方法を生徒に身に付けさせなくてはならない。それには客観的な根拠を文中から探し出すことが肝要である。

登場人物の心情を判断する根拠としては、第一に台詞・心内語が挙げられる。登場人物の感情の吐露であり思考が表出しているものだからである。次に、行動(動作)が挙げられる。身体は心(脳)が動かしており、行動(動作)は具体的な心情の表れと言えるだろう。そして、情景描写も押さえるべき根拠となる。作品に描写される情景は、登場人物の心情を投影している場合が多い。

本文を読みながら心情が表れた箇所には傍線や印を付けさせ、心情を丹念に分析する習慣を身に付けさせたい。

ウ 表現の理解

表現は書き手ごとにまちまちである。それは単に個性の違いだけにとどまらず、書き手の生きる国・時代などにも影響を受けているものである。書き手だけではない。読み手にも同じことが言える。

つまり、単語一つとっても頭に浮かぶイメージや含有するニュアンスは人それぞれ異なってくるのである。それほど言葉というものは繊細であり深淵なものである。

それゆえ、指導者は、生徒が言葉に対する興味・関心を抱くような指導を心がけていきたい。日頃からさまざまな表現に向き合わせ、言葉の意味をじっくり考える経験を積ませることが大切である。さらに、思考・心理の伝達媒体としても言葉を認識するようになると、前後関係から未知の言葉の意味を推察したり、行間を読んだりとい

うことも可能になってくるはずである。

とりわけ比喩表現に着目させたい。直接的な表現が多い「論理的な文章」に比べ、「文学的な文章」は意匠を凝らした表現に富むからである。

比喩表現とは、物事を説明する際に、類似した他の物事を借りて表現することであり、比喩であることを明示する直喩（明喩）や、明示しない隠喩（暗喩）などがある。喩えるものと喩えられるものが何かを押さえて読み進めることが大切である。

(三) 詩歌の指導法

ア 読解の進め方

教科書に取り上げられる詩歌教材は、詩・短歌・俳句の三つのジャンルが中心であるが、最近では、川柳や連句（付け句）、連詩といったジャンルも盛況であり、指導者にはジャンルにとらわれることなく、魅力ある古今の作品を生徒に紹介することが望まれる。「源氏物語」や「奥の細道」といった古典を見ても分かるように、詩歌と散文は決して相容れないものではなく、日本の文学の伝統においては深い関わりがある。詩歌を取り扱う単元を特別視することなく、取り扱う科目の一連の流れの中で、授業案を構築したい。

詩歌の授業における目標は、文学的な文章（散文）と同様に、表現の仕方に注意したり、想像力を働かせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくことである。

詩歌でも、論理的な文章や文学的な文章（散文）と同様に、作品に描かれた人物や情景、心情などを表現に即して読み味わうことが求められる。内容の読み取りが恣意的なものとならないように、客

観的な根拠を作品から探し出さなければならない。詩歌は一語一語に込められる意味の凝縮度が、散文に比べて一般に高い。そのため、散文の学習の時以上に、表現の特色に注意して読むことが必要となるだろう。ここで言う表現の特色には、作品の文体や形式（文語体と口語体、定型詩と自由詩など）、修辞技法（比喩や反復、倒置など）、同じ母音の繰り返しによる表現効果などが含まれる。

以上のような表現の特色を、生徒たちに気付かせるために効果的な学習活動として、音読が挙げられる。声に出して読むことによつて、作品特有のリズムや響きに気付くことも多い。また、初読の感想をまとめたり、必要に応じて作品の内容を詳述することも効果的である。さらに、同じ作者や同時代の詩歌を読み比べることによつて、内容や表現の仕方についての特色を見いだし、理解を深めることができる。

ただし、余りにも細部を分析的に読むことに偏ると、作品全体の味わいを損なうことになる場合もある。生徒の主體的な読みを大切にした。

イ 近・現代詩の扱い方

近・現代詩は難解だというイメージをもたれやすい。だが、近・現代詩にも、論理的な文章や文学的な文章と同様、作者の伝えたい意図というものが存在する。そして、その意図は往々にして、論理的な文章が問題提起において挙げるような、日常生活でふと気付いた新たな発見であることが多い。それは、人間らしく生きるとはどのようなことであるのかといった哲学的なテーマから、語句の意味や用法の発見などの言語学的な問題など、多種多様である。例えば、「I was born」（吉野弘）を前者において説明すれば、「目まぐるし

く繰り返される生き死にの悲しみ」となる。また、後者においてみれば、「生まれる」という表現に潜む「生きることのはかなさ」が読み取れる。このように、主題の表現の場として、または理論の実験の場として作品は制作されている。理論の実験である場合、読解が困難に感じられるけれども、表現の特色に着目する点では、やはり、論理的な文章や文学的な文章に対するアプローチと何ら変わることはない。

学習順序を具体的に示せば、作品の形態・内容に応じた効果的な朗読、生徒の感想交流、各連・各行の内容検討、語句や修辞技法の理解、情景や心理の把握、文体・調べの構造の分析といった順序での読解作業となることが多いが、授業の最後に総合的な鑑賞及び感想の文章化の時間を取る。

ウ 短歌・俳句の扱い方

短歌と俳句は、日本の伝統的な詩の中で生き残った二つであり、ほとんどの新聞に短歌欄・俳句欄が設けられていることから分かるように、世の中で広く親しまれている詩の形式である。したがって、古典和歌との関連を教えることも大切であるが、それ以上に、現代に生きる私たちの生活や心情を十分に表現できる親しみやすい表現形式であることを、生徒に実感させたい。授業の中では音読を大切にしたい。とりわけ短歌は声に出して歌われた時代の名残を受け継いだ詩であり、一つ一つの言葉の響きや五七五七七のリズムが、言葉の意味と同様に豊かなものを伝えている。また気に入った作品はぜひ暗唱させたい。散文と違って容易に覚えられる短歌や俳句は、生徒の心の宝物となるだろう。

短歌の読解指導においては、場面の理解と心情の解釈がポイント

となる。省略や飛躍などの技法を駆使し、言いたいことを圧縮して示すのが短歌の表現であるが、圧縮された言葉を解いて元の場面を再現することが場面の理解につながる。作品に使われている修辞や用語を手がかりに、季節・時間・場所・天候などを具体化していくと、そこに表現されている心情もおのずと浮かび上がってくる。

作者や作品について調べ学習をさせるのもよいが、作者の履歴と作品の解釈を結び付けることには慎重でありたい。指導者は、一首の独立性を意識して、生徒の読解を手助けするとよい。

俳句の読解指導は、短歌との共通点も多いが、より困難な点もある。切れ字・季語等の式目に加えて、省略・切り捨ての多用、暗示的・即物的な表現態度、言外の余情など、俳句特有の表現上の特色が作品の読解を難しく感じさせるからである。また、句意を正確に取るためには、作者の生活や時代背景、季語の使用方法などの予備知識が必要となることも多い。指導者はこれらの点を心得て作品理解を深めておく必要があるが、授業の際にはできるだけ生徒の読解を大切にしよう心がけたい。

情報量の少ない俳句の読解は、生徒の経験や想像に委ねられる部分が多く、導入を工夫すれば、解釈を楽しむ生徒は少なくない。生徒が相互に解釈と根拠を述べ合い、交流を通して読解を深め合う活動を行うのに、最適な教材と言えるだろう。

指導のポイントは、短歌と同じく、場面の理解と心情の解釈であるが、切れ字と季語の指摘は確実にやりたい。そして、十七音という極限まで切り詰められた字数の中に、かえって無限の空間が広がることを、生徒に感じさせたい。

変化に富んだ四季の移り変わりの中で、日本人の感性や美意識が

豊かに育まれてきたことを、短歌・俳句の学習を通じて伝えたい。

◆推薦図書◆

生徒だけでなく、指導者にとっても有用な書籍である。

小海永二『現代詩の解釈と鑑賞事典』旺文社 一九七九年

瀬戸賢一『日本語のレトリック―文章表現の技法―』岩波ジュニア新書 二〇〇二年

加藤治郎『短歌のドア』角川書店 二〇一三年

栗木京子『短歌を楽しむ』岩波ジュニア新書 一九九九年

神野紗希・水野タケシ『これから始める俳句・川柳 いちばんやさしい入門書』池田書店 二〇一四年

(五) 古典

ア 指導の際の留意点

中学校の教科書に取り上げられている主な古文教材には、『竹取物語』『枕草子』『徒然草』『平家物語』『おくのほそ道』『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』などがある。漢文教材では、『論語』『韓非子』や唐詩を取り上げられている。生徒が中学校において学習する古典は、あらずしや現代語訳、補足説明が添えられた取り組みやすい形になっている。内容理解の深まりという点では、高等学校から学習が始まると考えた方がよい。

イ 教材の精選

入門教材には、現代人にも通じるような感性や考え方、おもしろみのある作品を選び、生徒の興味を喚起したい。また、遊びの感覚から入りやすい百人一首を教材に取り入れるのもよい。

古文においては、古典常識について学んでいなくても理解しやすい作品から学習を始め、徐々に古文に描かれている文物や特徴的な習慣、考え方などを理解させていくとよい。また、作品の時代背景や歴史的意義にも目を向けさせたい。

漢文においては、故事や歴史といった比較的理解しやすい内容から始め、思想などのより抽象的な内容に挑戦させていきたい。また漢詩については、形式や押韻などの表現の特色に注目しながら内容を味わわせたい。その際、漢詩の音声資料などによって、言葉の響きやリズムを実際に確かめさせるとよい。

ウ 音読の指導

漢字の読み方や文節を意識させるための範読はもちろんのこと、指名読みをさせたり授業内に練習時間をとったりして生徒にも十分に音読をさせ、文章の言い回しやリズムに慣れさせたい。また、有名な古文の冒頭文や漢詩などは暗唱させるとよい。

エ 辞書の活用

古文の授業においては、言葉の単位としての「単語」を意識させ、その一つ一つの意味を押さえながら現代語訳ができるよう、古語辞典を十分に活用させたい。歴史的仮名遣いの学習をする入門期に丁寧にガイダンスを行い、その後も辞書を引く習慣が身に付くよう継続的に指導し、最終的には生徒自身が自主的に調べたい単語を見つけて学習を重ねていく姿勢を養いたい。漢和辞典についても、平生から使っている生徒はあまり多くないと思われるので、授業で漢和辞典を引くような状況を設け、漢文の予習等に活用させたい。

オ 古典文法・漢文句法の指導

前述のとおり、古典文法・漢文句法の学習は古典読解のための一

つの手段である。生徒には「古典の内容を正しく理解し、楽しんで読むために文法の知識が必要である」と認識させたい。そして、文法の指導を通して言葉に対する意識を高めるとともに、言葉に対する感性を磨かせたい。しかしながら、初学者に対しては、古典文法のテキストを最初から詳細に指導するのではなく、生徒の実態に合わせた指導内容の精選と指導方法の検討が必要であろう。長期的な指導の見直しをもつことも肝要である。

カ 古典常識の指導

扱う教材によっては、服装・暦・官職などの古典常識について学ぶことが必要となる。資料集や古語辞典の付録の絵、図などを使って生徒の興味を引き出し、理解させたい。

五 評価の際の留意点

「読むこと」の評価で難しいことは、発表や作文などの言語活動で生徒が表現したことを「読むこと」の評価としてもよいということである。その場合には、作品、記述等の表現されたものから生徒の「読む力」を評価する必要がある。「話す力」や「書く力」を評価するのではないので、留意しなければならない。また、生徒にも評価の観点を示すことが肝要である。身に付けさせたい資質・能力を見極め、それに沿った指導事項・言語活動を準備すると同時に、ルーブリックなど評価の観点を入念に用意しておく必要がある。

コラム⑫【授業見学のススメ】

「授業見学」は、見学する側はもちろんのこと、見学される授業者にとつても得るものが多い。

初心忘るべからず

初心者の謙虚な気持ちを忘れないという戒めとしてよく引用される世阿弥の言葉だが、「花鏡」奥段によればこの句に三箇条の口伝が添えられている。

是非初心不可忘 時々初心不可忘 老後初心不可忘

能を始めた若い頃の未熟な芸に対するくやしき、恥ずかしき、と多くの努力を忘れないということ。盛りから老後に至るまで、その時期の初心を覚えておくということ。そして、老後の風体にふさわしい芸の初心とともに、今までの芸の初心も忘れず、なお芸の向上を目指すべしということを意味している。

教員にたどるなら、初任者、中堅教諭、シニアリーダーに当たるといえるか。初任者のときは未熟なため先輩方の授業を見学して、授業を作り上げる。中堅教諭になると、若手教員から授業見学を依頼され、初めは指導するという自分の立場に緊張しながらも自分の授業を振り返り、授業の改善に努める。シニアリーダーは学校全体の授業改善に取り組んでいく。それぞれの段階で授業力向上を目指すためにも、まずは身近な教員同士で見学し合うことから始めよう。教員同士が互いの授業を見学し合い、授業改善に努める雰囲気ができることが望ましい。

コラム⑬【詩歌（俳句・短歌）の創作―方法と意義について―】

新学習指導要領では「文学国語」において、思考力・判断力・表現力等を育成する「書くこと」の言語活動に「ア 自由に発想したり評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動。」を例示する。この言語活動例について「高等学校学習指導要領（平成三十年告示）解説」（文部科学省）では、小説や詩歌などの創作においては物事を見つめ、思考し、想像し、構想し、それを表現する。創作した作品について相互に批評し合うことで、書き手は自分が想像し得なかった読み手の受け止め方を知ることができ、それを踏まえて書き手は自らの文章を振り返り、よりよいものにしてゆくための見通しをもつことができる」と解説されている。

では、実作方法をどのように指導すればよいのだろうか。一つには、俳句・短歌の相違点を明確にしてみせるのもよいだろう。例えば、俳句では自分の感情を表現する上で「うれしい」「かなしい」といった抽象化された言葉を用いるよりも、花の香り、秋の風など、景物に感情を託して描く、いわば「寄物陳思」を意識させたい。これに対して短歌の特性としては、上の句で対象を描き、下の句に主観を表白するという一つの典型を示してみせるとよい。無論、「田子の浦にうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」（『万葉集』巻三―三二八）のように叙景的技法をもって作者の内面を全面的に打ち出す作風もあるが、ここでは俳句との比較において短歌の特性の一面を生徒に理解させたい。そこで、この相違を「震災」という共通の題材を扱った作品によって例示してみると

淡雪や瓦礫めぐりて母探す

柏原眠雨『夕雲雀』（平成27）

地はすべて赤き熾火なりこの下に甥ありとも我がいかにせむ 窪田空穂『鏡葉』（大正15）

といったもので、前者は東日本大震災を、後者は関東大震災を詠んだものである。前者は「淡雪」のはかなさに母を探す心情を語らせやすいものと思われる。このように、俳句と短歌の違いの一面を知ることとは、生徒の創作意欲を刺激し、ひいては日本の伝統詩に対する理解を深めさせる一つのきっかけになるのではなからうか。ここでは「震災」の作品を取り上げたが、生徒に創作させる場合、共通の体験に基づく題詠（入学、夏服、遠足、体育祭、卒業など）が読み手（クラスメイト）の共感を得やすい。相互批評では、自分の推称する作品について意見を述べたり、言葉の用い方、表現技法などに問題のありそうな作品について話し合わせたりするといであろう。共感的な人間関係を基盤とした学び合いを通じて、生徒が自己の考えを広げたり深めたりすることを期待したい。

第六章 評価について

(一) 指導と評価の一体化

ア 今後求められる学習評価とは

新学習指導要領では、学習評価によって指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすることが明示された(第1章総則第3款2(1))。また、中央教育審議会は新学習指導要領のねらいを踏まえ、「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(二〇一九)の中で

① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

② 教師の指導改善につながるものにしていくこと

③ これまでの慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

を学習評価の在り方の基本的な考え方として示した。すなわち、これからの学習評価とは、定期テストや授業中の小テストなどのペーパーテストなどを行って生徒の評定を決めるもの(総括的評価)だけでなく、生徒の学習改善につながるもの(形成的評価)でなくてはならない。そして、車の両輪のように、学習評価によって教師は指導の在り方を振り返り、授業改善へとつなげていく必要がある。このように指導と評価を関連させて行い、それを更に次の指導へとつなげていくサイクルを確立していくことが「指導と評価の一体化」であり、極めて重要な考え方である。

イ 生徒の学習改善に向けて

学習評価を生徒の学習改善につなげるものにしていくにあたって留意しておくことは、学習改善の主体は教師ではなく生徒だということである。そして、生徒の学習改善を促進していくには、生徒が自身の学習について振り返り改善できる力を付けること、すなわち生徒のメタ認知能力を育成することこそが鍵であり、学習評価もそこに寄与するためのものである。自己を対象化して客観的に把握することで、新たな学びに向かう力を付けることができる。しかしながら、生徒にとって自らを客観視し、適切な評価をつけることは非常に困難なことである。

そこで有効になってくるのが、生徒同士の相互評価や教師との対話による評価規準の共有である。例えば、相互評価の中で生徒は互いに他者の課題を評価する機会を得る。他者の課題を教師のように評価する経験が、設定された評価規準の理解を促すと同時に、それに基づいて学習を評価するメタ認知力の育成へとつながる。また、学習成果物について、教師と生徒が対話をしながら振り返りを行うことで、生徒は評価規準そのものの深い理解をすることができる。そのように評価自体を学習の対象とすることによって、生徒のメタ認知力は向上していき、生徒自身の中に評価軸が生まれる。それは、更なる主体的活動の実現へと結びつく。また相互評価に関しては、単にメタ認知能力の育成につながるだけでなく、自らの考えを他者と共有したり、協力しながら一つの物事を改善したりする力を身に付けることができる。これらはまさに「対話的な学び」であり、「主体的・対話的で深い学び」になくはならないものとも言える。

(二) 評価に用いる資料

生徒の活動の表れを評価に関わる資料とする。

・生徒の発言、生徒の作成した板書

・ノート、ワークシート

・小テスト、定期考査

・生徒による自己評価表、相互評価表

上に挙げた全てを評価につなげることができる。ペーパーテストのみを評価に用いることがないようにする。

ア ループブリックの作成の仕方

(ア) ループブリックを用いた評価の特長

ループブリックとは、学習活動の中での成果物について、評価項目についての成功の度合いを示す尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる達成度表である。

表は横軸と縦軸から成り立っており、片方の軸に評価レベル(A、E、1、3など)を位置付け、もう一方の軸に評価したい資質・能力の評価項目を置き、それらが交差するセルの中にパフォーマンスの特徴を記した記述語を書き込んで並べて一覧表にする。

高等学校では知識量のみを評価するペーパーテストの結果が重視されてきたのではないかとの懸念が答申等でも示されてきたが、ループブリックでは言語活動で行われる「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」なども明確に評価できるという特徴があり、ペーパーテストの形式では評価が難しい観点を適切に評価することができる。また、評価対象や内容に合わせて評価の項目数や達成度を調整できるため、それぞれの学習の場に合わせた適切な達成度を設定することができる。

さらに、

・生徒にループブリックを提示することで、生徒が自身の学習目標について明確に意識することができるため、学習の調整などへとつながる。

・指導者としても指導内容の焦点化につながる。

・明確で客観的な基準での評価ができるため、生徒、保護者に開かれた評価が実現できる。

・ループブリックを複数の指導者で共有することで学年、学校としての学習評価の妥当性、信頼性を高められる。

など、多くの利点がある。

(イ) ループブリック作成の手順

ループブリック作成の手順の一例を以下に挙げる。

①活動を通じて付けたい資質・能力を確認する。

②資質・能力について、さらに複数の観点に分け整理する。

③それぞれの評価の観点について、三、四つ程度のレベル差を想定して、該当レベルの記述語を作成する。

それぞれの達成度における記述語は、生徒に提示すること及び評価のことを鑑みて、できるだけ具体的に明確なものにする。また、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにも、たとえ低い評価となる項目でも「〜できない」、「〜していない」といった否定的な言葉は避け、「〜できる」、「〜している」といった肯定的な語句を用いて記述する。

(ウ) ループブリック作成後の評価

ループブリック作成後は、実際に生徒の成果物(パフォーマンス課題)を評価していくことになるが、実践の中で多くの成果物が集まるにつれて、ループブリックで想定しなかったものが多く出てきたり、

どの段階の評価に当てはまるか分かりづらかったり、「説得力」「豊かな」などといった記述語そのものが曖昧でわかりづらかったりするなど、実際の評価の中で修正を迫られることが多くある。その際には最初のルーブリックにこだわらず、必要に応じて再検討していく。

予め作成したルーブリックを通年で修正することなく評価を終えられることはまれであり、精度の高いルーブリックを作成するのは難しい。最初から完璧なものを作れないため、少しでもよいものを作って活用するという意識を進める。

また、複数の指導者により同一のルーブリックを利用して評価を行っている場合、生徒の成果物をもとに、複数の指導者がそれぞれつけた点数と根拠のすり合わせを行うこともある。その際は、それぞれの段階の評価を代表する典型的な成果物（アンカー作品）を添付すると、それぞれの段階で求められている達成度をより明確に示すことができる。

イ ポートフォリオ評価

ポートフォリオ評価とは学習の成果物やその過程で生み出されたものを一つのファイル等の容器（フラットファイルなどを用意することが多い。物理的なファイルだけでなく、データ上のフォルダなども含む。この容器を「ポートフォリオ」と呼ぶ）に蓄積し、それによって評価を実施するものである。ポートフォリオの中には、生徒自身が作成した成果物だけでなく、教師からのフィードバックや他者からの相互評価、時には音声ファイルや映像など、さまざまな媒体のものを蓄積する。

ポートフォリオ評価の特長として以下のものがある。

一つ目は学習過程に対する評価が可能となる点である。学習において完成した成果物だけでなく、そこにいたるまでの過程や試行錯誤の軌跡、他者とのやりとりの中で「対話的」に学習が深まってきた様子など、幅広い視点からアプローチできるようになる。また、生徒自身も最終結果だけにとらわれることなく、自身の学習について評価できるため、自身の成長を実感でき、自信をつけるとともにより意欲的な学習につながっていく。すなわち、ここでは「主体的で対話的な」学習が行われていると言える。

二つ目は学習に対するメタ認知を促すことである。現在、学習の効果をあげるための方策として、生徒が自らの学び方を意識して調整しながら粘り強く取り組むことの重要性が認識されている。ポートフォリオを用いて自分の学習の軌跡を振り返ることは、こうしたメタ認知能力の育成を可能にする。また、自分だけでなく、教師とともに対話をしながらポートフォリオを振り返ることで、生徒と教師が評価プロセスにおけるパートナー的関係を築くことができる。

さらには、保護者にも開示することによって、評価がより開かれたものになることや、先輩の作品を参照するなど学習に役立てることも容易であること、複数の教科においてポートフォリオを共有することで教科横断的な学習ができることなど、数多くの利点がある。一方で、自由度が高いからこそ、ポートフォリオ作成の目的を明確にし、それを踏まえた上で、ポートフォリオの自身については検討していく必要がある。時には生徒自身に学習の目的に応じて、どのようなものの中に収めていくかを検討させることもある。

(三) 評価の方法

生徒の学習活動の成果を評価の対象とする。評価方法は次の三段階で設定する。

ア 観察、点検

- ・ 行動の観察 … 学習の中で、評価規準が求めている発言や行動などが行われているかどうかを「観察」する。

- ・ 記述の点検 … 学習の中で、評価規準が求めている内容が記述されているかどうかを、机間指導などにより「点検」する。

イ 確認

- ・ 行動の確認 … 学習の中の発言や行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」する。

- ・ 記述の確認 … 学習の中で記述された内容が、評価規準を満たしているかどうかを、ノートや提出物などにより「確認」する。

ウ 分析

- ・ 行動の分析 … 「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて「分析」を行うことにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。

- ・ 記述の分析 … 「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの「分析」を行うことにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。

ア・イについては、生徒の学習状況を把握したり、努力を要する状況にある生徒を確認したりすること、その後の指導に生かすための評価である。ウについては全員を対象とし、総括の資料に生かす「記録に残す評価」である。

(四) 評価の計画

ア 年間の計画

各教科及び科目の単元における評価を実施するに当たっては、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめ」などの評価規準の考え方を踏まえて、各単元ごとの評価へとつなげていく。

イ 毎時間における評価

学習指導のねらいが生徒の学習状況の高まりに現れているかについて、評価規準を基に観察し、毎時間の授業で適宜指導を行うことは、生徒の資質・能力を育成するために必要不可欠である。その上で、生徒の学習状況を評価するための記録を取っていくこととなる。一方で、毎時間生徒全員について記録をとり、蓄積していくことは現実的ではないため、生徒全員の学習状況を記録に残す場面を精選するなど、計画的な評価を行うことが重要である。

ウ 単元（内容のまとめ）における評価

指導後の生徒の状況を記録するために、単元などある程度の長い区切りで評価する。総括を行う時期として、単元以外には学期末や学年末等の節目が考えられる。

(五) 評価の方針の共有とフィードバック

学習評価の妥当性や信頼性の向上、生徒の学習意欲の向上、学習方法の改善、指導者の授業改善などのために学習評価の方針を事前に生徒と共有するとともに、評価した後には評価をフィードバックする必要はある。また、その際には、どのような方針によって評価したのかを改めて生徒と共有することも重要である。

(六) 努力を要する状況にある生徒への対応

学習の振るわない原因を、生徒のノート、家庭学習、発言内容などから詳しく分析し、次時に指導する必要があるが、場合によっては個人指導をする。

また指導者の側にも反省が求められる。教材は適切か、授業の展開が整理されているか、難しいと予測される内容は、ゆっくりと時間をかけて繰り返し説明されているかなど、毎回の授業における振り返りを必ず行う。もし指導者に不備不足があれば、後の授業で必ず不足点を補うようにする。

◆参考文献等◆

【書籍】

- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために』有斐閣 二〇一五年
- ダイアン・ハート著 田中耕治監訳『パフォーマンス評価入門 「真正の評価」論からの提案』ミネルヴァ書房 二〇一二年
- 田中博之『「主体的で対話的で深い学び」学習評価の手引き 学ぶ意欲がぐんぐん伸びる評価の仕掛け』教育開発研究所 二〇二〇年
- ダネル・ステイブンス・アントニアレビ『大学教員のためのルー

ブリック評価入門』玉川大学出版部 二〇一四年

【答申等】

- 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」中央教育審議会 二〇一六年
- 「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」中央教育審議会 二〇一九年
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）文部科学省国立教育政策研究所 二〇二一年

コラム⑭【百人一首から創作を】

和歌は難しい。和歌が少し分かりやすく感じられるのは、例えば「伊勢物語」の授業で、登場人物の心情とともに歌われたものを解釈するときだろうか。あるいは、現代短歌の授業をおもしろいと感じた後に、ふたたび和歌に触れたときだろうか。いずれにせよ、誰かに読み方を教えてもらわなければ、なかなか理解しにくいものである。生徒たちの大半は、きつと和歌は読みにくい、難しい、苦手、と思っているだろう。そんな彼らに、和歌は感情のほとばしりであり、自分たちも気持ちを共有できるという体験をさせることができたら、どんなにかすばらしいだろう。

百人一首に「明けぬれば暮るるものは知りながらなほうらめしき朝ぼらけかな」という歌がある（第五十二番）。高校一年で習う文法でも十分解釈は可能だ。「夜が明けると日が暮れるものだと分かっているが、それでもやはり恨めしい夜明け方であることよ」

口語訳まではずぐできる。さて、そこから生徒に質問を試みよう。「どうして恨めしい？」「朝がくるのが嫌だから」「どうして朝が嫌なの？」「起きたくないから」「うーん…どうして起きたくないの？」「学校行きたくないんじゃない？」「……」「ここまでのことはないにせよ、なかなか本当の意味にはたどりつけないことだろう。古典の得意な生徒が、「恋人と別れて会えなくなるのが悲しいから」と答えたとしても、それをすぐに正解としない方がいい。彼（彼女）がちらりと知識を見せて、「通い婚だから、朝別れるんじゃないですか」と言ったら、「今晚また会えるのにどうして悲しいの？」と、更に問いかけてみよう。どんな答えが返ってくるだろうか。

「明けぬれば暮るるものとは知りながら」、つまり「今晚会える確約があつてさえ」あなたといられないのがつらいのです、ということろまで読み取れたとき、生徒の人生経験はうんと豊かになったことにならないだろうか。もちろん高校生に「後朝」を問うわけにはいかないが、その心情は現代に生きる生徒たちにも十分理解できるものだと思う。そこまで理解した生徒に、現代語訳をベースとした創作を自由にさせてみよう。グループをつくって取り組ませると、あれやこれや言い合って楽しみながら予想以上におもしろい作品が生まれることもある。もちろん一人で詩や小説を書き出す者はそれでよい。国語の授業であれば言葉による表現が望ましいが、得意な生徒がいればイラストで表現させてみるのもよいと思う。

どんな和歌を使うかという悩ましさはあるが、マンガでも百人一首の解説が出ているので、教材研究の参考書はかなりあると思う。

◆参考資料◆ 佐佐木幸綱『口語訳詩で味わう百人一首』さ・え・ら書房 二〇〇三年

吉海直人監修『マンガで読む百人一首』学研教育出版 二〇一三年

第七章 ICTの活用について

情報化があらゆる場面で広がる現代において、生徒は既にさまざまな場面でICT機器に触れている。授業内でも生徒の学習段階や授業内容に合わせて、効果的に活用していくことが望ましい。ICT機器を活用することで生徒の主体性を引き出し、リアルタイムの対話によって更に学びを深化させていくことができる。また、教師側の準備時間の短縮、手間の削減などの利点もあり、可能性は広がっている。取り組んでみることで見えてくる活用方法もあるため、さまざまな場面で積極的にICT機器を取り入れ、教師自身のICT活用能力も高めていくことが望ましい。

実際に使用する機器については、ハード面、ソフト面どちらも日進月歩である。以下に示した利用法も一例であり、ウェブ上でも日々さまざまな実践例が報告され、簡単にアクセスできるようになってきた。国語科での実践例だけでなく、他教科での実践例も参考になる。柔軟な発想で授業に取り入れたい。

(一) 提示の仕方

教師が資料を提示するだけでなく、生徒が作成した資料や持ち寄った資料を提示し、クラス全体で共有するなどの利用ができる。授業の導入としての資料提示の他、単元のまとめとして生徒による要点の発表を取り入れる方法もある。生徒が作成した資料を提示する場合は、プレゼンテーションの形をとることで、「話すこと・聞くこと」領域の指導に関連させられるとよい。

(二) 双方向性を生かした授業

ICT機器を用いると、意見の集約と発信が短時間で行うことができる。例えば、授業内で生徒に意見を送信させ、画面上で集約してクラス全体で共有し、それを基に読解を深めていく活動などに応用できる。ICT機器を使えば匿名での意見発表も容易になるため、教室内での発表に消極的な生徒の意見も反映しやすい。生徒の主体的な意見交換を通して、教室内での議論の深まりが期待できる。

また、従来のようなプリントの回収・複製・再配付などの手間を削減できる。回収から配付までの時間差もなくなるため、授業の流れが断絶されず、連続した授業展開ができる。

(三) 家庭学習・課題としての活用

ア 授業前の活用

動画等で予習させることで、生徒間の事前の知識差をできるだけ小さくし、読解を深める作業により時間を割くことができる。また、あらかじめ教材となる文章に関連した分野について調べ、疑問点を挙げさせておくことで、読解に取り組む意欲を喚起することにつながることもできる。事例は「反転学習」などのキーワードで検索するとよい。

イ 授業後の活用

四十人が一斉に授業を受ける場面では、理解が追いついていない生徒への手助けに時間を割き難い。支援を要する生徒に対するフォローアップ教材を作成し、生徒がすぐにアクセスできるようにしておけば、配付までの時間をとることなく生徒が復習に活用することができる。主に知識の定着を目的とする学習活動で利用したい。

ウ 生徒の必要に応じた活用

ICT機器を活用して、必要な情報をネットワーク上から手に入れる利用方法以外にも、授業内でも生徒が必要に応じてアクセスできるシステムが整備できれば、生徒の学習段階に応じたきめ細かな対応ができるようになる。例えば、教室内で同じ課題に取り組み場合、支援が必要と思われた生徒だけに、ヒントとなる情報を与える際に有効である。

ICT機器を使用して作られた教材は、複製や共有がしやすく、保管場所も取らない。作成したデジタル教材を蓄積することで、学校全体の財産にもなっていく。教師間で作成したデータを共有し、より生徒の実情に応じた教材にできるとよい。

コラム⑮ 【郷土の文学】

文学の現地踏査は有意義なものである。その場に当時の人々や作者がいたという歴史的なロマンを感じられること。同時に、その作品や文章を身近なものに感じられること。教える側が親しみをもっておもしろいと思っていると、それが授業で生徒に伝わり、愛知の文学を知る第一歩となる。まず、先生方に愛知の文学を知ってほしい。愛知にも素晴らしい文学がたくさんあり、縁があつて愛知で学びをともししていることを、大切にしてほしいと願う。

愛知の文学を知るための本として「あいち文学散歩」がある。全国高等学校国語教育研究会第46回研究大会愛知大会の記念誌として、現職の国語教員が実際に現地踏査をして編集したものである。この本の「はじめに」の中に、「その作品を育んだ場所を訪れ、作品を広げてみる」とある。私たちは教科書で切り取られた部分を中心に教える。しかし、文章はつながりであり、その背景を知ること、文章の本当の意図が理解できる。また、「あいち文学散歩」は全国高等学校国語教育研究会第30回研究大会愛知大会の記念誌である「愛知の文学」を前身としている。さらに、総合教育センターウェブページの「Web版愛知県文学資料館」も、愛知の文学作品を教材として扱えるように作成されている。愛知の文学が教材とするに足るものであるという矜持や郷土愛が込められた資料となっている。「愛知の文学」の序文に、「郷土文学、郷土教材として、あるいは生涯学習の一環としてご利用いただき、いにしえ人の心に思いを馳せ、今様の立場から未来像を伺う一助としていただければ幸いです」とある。ぜひ、諸先生方の思いを受け取り、先生方の授業の種にしていきたい。

